0050255000

0050255-000

特２７７－３１０

発展的読方の実際

秋田喜三郎・著

明治図書

尋４

昭和２

AHJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年５月１５日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

東京高等師範學校教授 秋田喜三郎著

讀方課本 發展的讀方の實際

東京 明治圖書株式會社

昭和二年一〇月廿七日

特277
310

国立国会図書館蔵書

152295

はしがき

一　私は數年來學習指導について研究の歩を進めて參りました。而して學習指導の窮極は方法の問題でなくて教材研究の問題であることを痛感しました。本書を公にする動機は此處にあります。

二　ところが從來の教授書類は多く訓話的註釋的の解說書で、まだ文章を中心とした學習指導には極めて縁の遠いものであります。故に私は此の要求に應ずべく學習中心と文章本位を標榜して、文章の本質的研究と學習指導の實際に重きをおいて本書の編著にあたりました。

三　本書は發展的讀方の實際を示したものでありますが、また「讀方學習指導案」と見ても差支ありません。故に讀者諸君が授業の實際にあたり、その參考とせられるには極めて至便なものであります。

四　本書の研究要項は一主題、二研究、三指導計畫、四時間、五準備、六參考

の六項に分ち、讀本の全課に亘り、それ〳〵實際的研究を示したものであります。今各項目の内容につき簡單に說明しておきます。

五　主眼にはその課の主眼點を文章の意味に基づいて記してあります。意味を正しく把り得たものは文章を正しく理解したもので、文章の形式を通して此處に到達したものであります。形式内容等とわけないのはかういふ譯です。

六　研究欄には右の主眼を生むに至つた文章研究を具體的に示したものであります。從來の教授書類には殆どその類例を見ない所で本書の最も力を注いだ所であります。文章を徹底的に研究してこそ文章本位の指導は可能になるものと信じます。

七　指導計畫には右の文章研究より教材の特質難易等が明瞭しますから、此の教材を兒童に學習させるには、その能力を顧慮しなければなりません。故に教材の本質と兒童の能力とを酌量して、教材及び兒童に適應して指導計畫を定めました。

八　時間には相互學習の豫想時間を記しました。この他に獨自學習の時間を豫想せねばなりませんが、獨自學習は兒童により一定することが出來ませんから、今は之を强ひて示さないことにしました。準備には必要な方便物を記すこと、は從來の教授案とかはりはありません。

九　參考欄には教師の參考に資すべきものをあげました。

十　本書は拙著「發展的讀方の學習」の實際篇で、發展的讀方の實績は本書によつて實現せられるものでありますから、本書運用の精神を知らんとする士は「發展的讀方の學習」を併せ繙かれんことを願ひます。

十一　本書はまた教材上よりは拙著「國語讀本の縱斷的研究」の横斷的研究にあたるもので、全課の具體的研究を示したものでありますが、全國語讀本編纂の組織體系を知らんとする士は「國語讀本の縱斷的研究」につかれ、而して本書を活用せられんことを望みます。

十二　本書の參考欄には「國語讀本新教授書」によれるものが少くありません。その引用を快諾せられたる明治圖書株式會社に對し、謝意を表する次第であります。

昭和二年二月

三笠山麓の寓居

著者識

讀本全課 發展的讀方の實際

目次

巻七

第一　世界……一
第二　長き行列……九
第三　横濱……一四
第四　潮干狩……二二
第五　れんげさう……三二
第六　鎌倉攻……三七
第七　傘松……四四
第八　馬……五〇

第九　大阪……五五
第十　獅子と武士……六一
第十一　初夏の夜……六八
第十二　大連だより……七二
第十三　一太郎やあい……七九
第十四　川中島の戰……八七
第十五　カヂ屋……九四
第十六　航海の話……一〇一
第十七　安倍川の義夫……一〇九
第十八　木下藤吉郎……一一九
第十九　海ノ生物……一二五
第二十　マリーのきてん……一三二
第二十一　二百十日……一四〇
第二十二　助力……一四七
第二十三　加藤清正……一五二

卷八

第二十四　彼岸……一六五
第二十五　電報……一六七
第二十六　注文……一七二
第一　山の秋……一七七
第二　犬ころ……一八五
第三　競馬……一八七
第四　武將の幼時……一九六
第五　揚子江……二〇五
第六　呉鳳……二一〇
第七　心と心……二一六
第八　手の働……二二二
第九　炭……二二五

第十　朝鮮人參……二三〇
第十一　大岡さばき……二三四
第十二　手紙……二四一
第十三　鷲……二四八
第十四　餅つき……二五四
第十五　町の辻……二六三
第十六　看板……二六九
第十七　塙保巳一……二七四
第十八　アメリカだより……二七九
第十九　コロンブスの卵……二八七
第二十　税……二九二
第二十一　水の力……二九七
第二十二　啞の學校……三〇一
第二十三　名古屋市……三〇一
第二十四　廣瀬中佐……三一三

第二十五　胃とからだ……三一〇
第二十六　分業……三一五
第二十七　人を招く手紙……三二〇
第二十八　乃木大將の幼年時代……三二六

讀本全課

發展的讀方の實際〔尋四〕

卷七

第一　世界

秋田喜三郎著

宮城縣教育會藏書

世界について大體の知識を得させて、我が日本の世界に於ける地位を悟らせるようにしてある。

研究

1　世界がどんな狀態にあるかを說明した簡潔體の文章である。

2　表示して見ると、

(1) 名稱

世界――形まるくして球の如し――地球といふ

(2) 地球の表面

- 海
  - 陸の二倍半
    - 太平洋
    - 大西洋
    - 印度洋
- 陸
  - アジヤ洲
  - ヨーロッパ洲
  - アフリカ洲
  - 南アメリカ洲
  - 北アメリカ洲
  - 大洋洲

(3) 大日本帝國――アジヤ洲の東部にある

(4) 世界の國――六十餘國――

- 大日本帝國
- イギリス
- フランス
- イタリヤ
- アメリカ合衆國

（大日本帝國〜アメリカ合衆國：五大强國）

3　概括的に書いた說明文で、記述が極めて簡潔であるから、此の學年の兒童には餘り興味のない文章である。

4　文・語文の初出の課である。今これを口語體に譯して見ると次のやうになる。

われら（私ども）の住む世界は、其の形まるくして、（其の形がまるくて）球の如し。（球のやうである）ゆゑに之を地球といふ。

地球の表面には、海と陸とありて、（海と陸があつて）海の廣さはおよそ（大かた）陸の二倍半なり。（である）

海を分けて太平洋（と）大西洋（と）印度洋とし、陸を分けて、アジヤ洲（と）ヨーロッパ洲（と）アフリカ洲（と）南アメリカ洲（と）北アメリカ洲（と）及び（それから）大洋洲とする。

我が大日本帝國はアジヤ洲の東部にあり（ある）。地球の上には大小合せて六十餘國あり（六十餘國がある）。其の中我が大日本帝國と、イギリス（と）フランス（と）イタリヤ（と）及び（それから）アメリカ合衆國を世界の五大强國といふ。

指導計畫

1　卷六までにおいて、大體國土の觀念を與へたのであるから、本學年においては國土を出て、世界の舞臺へ進むやうになつてゐる。その舞臺として本課の指導にあたらなければならぬ。

2　前學年の劈頭、卷五の第一「大日本」の課で、おぼろげながら我が國を明かにし、第二「中村君」・第四「松太郎の日記」・第十六「日本三景」・第二十六「東京停車場」、卷六の第二「日本の高山」・第十三「鮭」・第十八「賀茂川」・第二十六「伊勢參宮」等において地理的に、又卷五の第三「大蛇たいぢ」・第五「金鵄勳章」・第十一「熊襲征伐」・第十五「養老」・第二十「八幡太郎」、卷六の第六「くりから谷」・第十「弓流し」・第十五「萬ぢゆの姫」・第二十一「神風」・第二十三「千早城」等に於て歷史的に我が大日本を研究して來たのである。而して本學年の劈頭に於て更に世界研究の途に上つて、兒童の眼界を擴め、本卷及び卷八に於て次第にその內容を充實させ、やがて第五學年の地理國史學習の基礎たらしめる用意がありたい。

3　地球儀と地圖と挿圖等を利用して、本文の內容――主として地名方位を明かにし、位置を知らしめておかなくてはならぬ。

4　六十餘國中の五大强國については特に兒童の注意を喚起し國名は記憶させるがよい。

5　又我が國の世界に於ける位置と地位を明かにして、五大强國の一たることの自覺心を起させたいと思ふ。

6　散文としての文語體は本課が始めてである。而も本卷に至つて、文語文は急に增加してゐる。廿六課中九篇を數へる。文語文は文法が口語と異なる點があるので、兒童は理解に困難を感ずることゝ思ふから、その指導には餘程注意を要する。その方法として文語を口語に解譯する練習が必要になつて來る。しかしその解譯は「ありて」はアッテ、「なり」はデアルといふやうに敎へ込まないで、「海と陸とありて……」、海と陸とがどうかといふやうに推解させて、アッテの口語を發見させるやうにしたい。

7　地圖も亦兒童には理解が困難であるから餘程注意しなくてはならぬ。これまで地圖として現はれたものは三回で、此の兩半球圖は四回目であるが、大

ぶんかけはなれてゐるからむづかしい。巻三の「私の村」の平面圖はやゝ立體的、繪畫的のもの、巻五、「遠足」の地圖は粗雜ではあるが稍〻進んだもので種々の記號も用ひ、里程等も記入されてある。巻六の「賀茂川」の京都市街圖は精密なものであるが、甚だ局部的である。それが本課に至つて俄かに世界全圖を提出されたのであるからちよつと理解に困るであらう。しかし地球儀によつて餘程理解が助けられ、又從前の地理的、歴史的の課に於てそれ〴〵地圖を以てその場所を示して地圖になれさせておけば、この場合さう困難なことはない。なほ本課の挿圖は今後機會ある毎に利用させるやうにしたい。

8　語句では「ゆゑに」「およそ」の副詞的職能、「及び」の並列の意味を明かにし、「東部」の意味を「東方」と比較させてその異同を明白にしなければならぬ。

9　漢字では形・球・洲・及・部・衆等の如き點畫の誤り易いものが多い。因に新出漢字は十二巻の中で本巻が最も多い。故に此の學年は文字練習にはかなり努力を要する。

時間　約三時間

準備

地球儀、世界地圖。

參考

文字の讀方

球（キウ）の如し。其（ソノ）の中（ウチ）。

語句の意義

【如し】やうである、似てゐるの意。

【ゆゑに】であるから、さうであるから。

【表面】うはつら、內部に對して外部を、又裏面に對していふ。

【およそ】大かた、ざつと、嚴密でない意味を表はす副詞である。

【及び】「と」「それから」等の如く、物を並べていふ場合にその中間に挿む語である。

【五大强國】五つの世界でりつぱな强い國、「大」の意味は領土の大きい意味ではない。

【東部】東の方の部分。

第二　長き行列

主眼

全國八百萬の小學生は第二の國民として、將來この世界無比の帝國を背負つて立つべく足なみ揃へていそしんでゐるが、自分もその八百萬の一員であり、同じ行進を續くるものであることを自覚し、且つ誇つて友を促せる作者の氣分を味はせたい。

研究

1　全校八百の生徒を有する或る小學校の生徒が、全校遠足の長き行列の印象を基として、全國八百萬の小學生の長き行列を想像し、友達と共に自分等もその一員なることを今更のやうに感じ、且世界無比なる帝國を背負つて立つべき第二の國民たることを自覚し、誇りあへる詩である。

2　詩の想を敷衍して見よう。

一年生を先頭にして、二、三、四、五、六年と四列になつて歩くと、全校生徒の八百は八十間にもなる。日本中の小學生は八百萬人あるといふことだが、この八百萬の小學生が同じやうに四列になつて歩いたならば驚くべし、八百萬間になるわけだ、さうして君、この長い行列の中の一人は君で、僕も亦その中の一人だよ。驚くべき長いものだが矢張り僕等のやうな小さい子供の一人々々が集つて八十萬間になるのだ。又日本中の小學校は三萬近くあるといふことだ、さうするとこの八百萬の小學生は三萬近い學校に分れ〳〵になつて學んでゐるのだがその望みは皆一つで變ることなく、八百萬といふ驚くべき大ぜいのものが皆一樣に足なみをそろへて進みつゝある。

望！　それは世界にたぐひなき我が帝國の立派な國民とならうとすることである。

3　子供を作者とせる詩としては少し不似合ひの感がする。明晰ではあるが餘韻と情趣とに乏しい。詩としては成功したものでない。

指導計畫

1　第一課において世界の舞臺に進んだ兒童は、その世界に國なす島帝國の小國民としての自覺がなくてはならぬ。此の自覺心を起させる樣指導するのが本課の眼目であると思ふ。

2　先づ此の歌を讀ませて誰が作者であるかといふことを明かにすることが大事である。作者は

君、此の長き行列の
中の一人は君にして
中の一人は僕なるぞ　　第二節

三萬近き學校に
分れて學ぶわれ〳〵の
望に向ふ足なみは
皆一せいにそろふなり　　第三節

の箇所に現れてゐるから、此の所から想定させるやうにする。

3　第一節は第二節をよく理解せしめんために歌はれたもので、題意の長き行列は第二節の八十萬間の行列である。此の關係を明かにし、作者の行列中の

一人であることを意識させなくてはならぬ。

4　この課の眼目とする所は第三節で、三萬近くの學校に分れて學んでゐても、我等の進む道は皆一齊に揃つてゐる。「世界に比なき帝國の、强き御民とならねばならぬ」我等の目標はこれだ。この點をよく讀み味はせることが要點である。

5　讀解上注意を要する點は、「八十萬間つゞくべし」と「强き御民となるべし」のべしの讀みわけ、「四列になりて歩かんか」の假設の意味、それから次の倒置であらう。

分れて學ぶわれ〳〵の
望に向ふ足なみは
皆一せいにそろふなり。
世界に比なき帝國の
强き御民となるべしと。
强き御民となるべしと。

これは

分れて學ぶわれ〳〵の
望に向ふ足なみは
世界に比なき帝國の
强き御民となるべしと。
强き御民となるべしと。
皆一せいにそろふなり。

のやうにすれば、意味はよく通ずる。「强き御民となるべしと。」の反復は如何にこれを强く考へてゐるかゞわかる。

6　讀み方では行・學・望・御等特に注意を要する。

時間　約二時間

參考

文字の讀方

四列。日本。中の一人。望。世界に比なき。强き御民。

語句の意義

【先頭】隊などの一番先き。

【八十間もつゞくなり】「なり」は詠嘆の意。

【歩かんか】若しも歩いたならば。

【八十萬間つゞくべし】「べし」推量の意。

【僕なるぞ】僕であるぞ、僕だよ。

【望】めあて、目的。

【足なみ】足どり、歩調。

【一せい】（一齊）ひとしく、同時に。

【比なき】たぐひなき、くらべものない。

【強き御民になるべし】強き御民、「強き」は強兵の意味でない、立派に働き得るといふやうな意味であらう。

「べし」は推量でなく、「ねばならぬ」とか「なりませう」とかの意味に解すべきである。

第三　横濱

主眼

我が帝國の大貿易港としての横濱が、帝國の門戸として文物の交通路となって商船の出入絶えることのなき盛況を知らしめたいと思ふ。

研究

1　帝國の一大貿易港としての横濱を概說した說明文である。

2　要項を表記して見よう。

- 1　位置と概說
  - 東京の西南八里半の所にある
  - 一大貿易港――商船の出入たゆる時なし
- 2　港の規模
  - 防波堤あり――風波のおそれ少し
  - 水深し――大船もきしに横づけ

横濱
- 3 輸出入品
  - 輸出品
    - 生・絲（羽二重）→ アメリカ合衆國 / イギリス / フランス
  - 輸入品
    - 綿（最多し）← 印度 / アメリカ合衆國
    - 鐵類 ← アメリカ合衆國
- 4 帝都との交通
  - 汽車、三十分毎に發着
  - 電車、十分毎に發着

3 簡潔にかゝれてゐて、しかも横濱の大貿易港としての活躍振りがよく現はされてゐる。

次の諸點を讀むと横濱の活況を呈せる有樣が髣髴とする。

1 横濱は……商船の出入たゆる時なし。

2 港には防波堤ありて……いかなる大船もきしに横づけにすることを得。——（挿繪參照）

3 横濱と東京との間には、……汽車はおよそ三十分毎に、電車はやよそ十分毎に發着す。

4 文語文としての新形式は次のやうてある。

出入たゆる時なし（出入のたえる時がない）

いかなる大船もきしに横づけにすることを得。

（どんな大船てもきしに横づけにすることが出來る）

しかして（そうして）

發着す（發着する）

指導計畫

1 地圖や寫眞と對照してなるべく明確に理解させねばならぬ。文章だけては眞に理解され難い點が多い。地圖及び寫眞を中心として說明を要するものは次のやうてある。

「東京の西南八里半の所」

「防波堤ありて、風波のおそれ少く」

地圖
「アメリカ合衆國、イギリス、フランス等に送る。」
「綿は印度、アメリカ合衆國より、鐵類はアメリカ合衆國より來るもの多し」
「横濱と東京との間には汽車、電車の便あり。」

地圖では第一世界の挿圖をもよく參照させなくてはならぬ。

寫眞
「商船の出入たゆる時なし」
「防波堤ありて……」
「水深くして如何なる大船もきしに横づけにすることを得」

2　「貿易」といふことは本學年の初め頃としては餘程理解に困難であるからよく具體化して補說もしなければならぬ。

3　貿易港とか防波堤とか、輸出品とか、輸入品とかいふ地理的の術語はよく理解させておかねばならぬ。

4　貿易港としての横濱を知らせると共に、その輸出港であることを機に觸れて示すがよい。

5　文語文の初期であるから、文語を理解させる爲めの綿密な取扱ひをすることを忘れてはならぬ。

6　新出並に讀替漢字がかなり多く、地理的の術語も少くなく、文語文であるから讀解が困難であると思ふ。讀解をよく指導して横濱港を明かにするやうにしたい。

7　貿易(易)・港・輸・得・便等は點劃が誤り易く、「横」の旁が一劃少いのと、「分」の頭の割れてゐないのは新字形を採用したからである。

時間　約三時間

準備

地圖
- 日本全地圖及世界交通圖。
- 東京横濱附近及横濱港の地圖。

寫眞
- 横濱港に船舶輻輳せる所、
- 防波堤を示すもの、
- 挿繪の如く棧橋横づけの光景

生絲羽二重の標本、

參考

文字の讀方

一大貿易港。　出入。　風波。　大船。　生絲。　來る。

語句の意義

【西南】西と南との中間の方角、

【貿易港】貿易とは商品を賣買交換すること、港とは船舶の碇泊、船客貨物の積卸の便に供する相當の設備をなせる所、それて貿易港とは貿易をする港のことて內地間の貿易をするところも海外貿易をするところも共に貿易港といつてよいわけてあるが、現在ては開港場卽ち外國貿易をなす港を貿易港といつてゐるやうてある。又貿易といへば外國貿易をさしてゐるやうてある。

【防波堤】海中に突堤を築いて外洋の風を遮り、中にある船舶を安定にさせるもの、（寫眞にて示す）

【横づけ】岸に直ちに舟を横につけること、港が淺いと船底がつかへて横づけにならぬから艀を用ひる。

【輸出品】外國へ賣出す品物。

【輸入品】外國より買入れる品物。

【主なるもの】目立つた物。

【羽二重】純白て最も優良な生絲を經緯共に用ひて織つた最も肌ざはりのよい絹布て、又純白に練り上げたもの、これを白羽二重といふ。其の他に紋様を浮織した紋羽二重、綾に織つた綾羽二重等もある。

【汽車電車の便あり】汽車電車に乘れるといふ便利がある。

【發着】出發したり、到着したり。

第四　潮干狩

主眼

作者の文章を透して、潮干狩の樣子とその面白さを想像させて、觀察と表現の態度を養ひたいと思ふ。文末の書翰文については贈與文の形式の一班を知らせたい。

研究

1　潮干狩の樣子や心持をそのまゝに寫した文章で作者は尋四位の正男といふ男兒である。文の調子によつて男兒であることは推察されるが、文中特に作者が頭を現してゐる所は次のやうである。

(1)　正男の名は文末の書翰に出てゐる

(2)「にいさんが我は海の子をうたひ出して」

(3)「僕が一番先に海へ下りた」

(4)「おとうさんも、にいさんも、丸山君も、妹も、お松も、みんな下りた。」

これ等が作者を想定させる箇所である。

2「舟が岸をはなれた。もやが水の上をこめてゐる。大川を下つて行く舟の中はうすら寒い。不意に白い鳥がもやの中からとび立つた。おとうさんにうかとつたら、かもめだとおつしやつた。川口近くになると、潮干狩の舟がいくそうもよつて來た。潮がずん〳〵下がるので、舟はすつすと進んで、たちまち海へ出た。にいさんが「我は海の子」をうたひ出して、丸山君が合唱した。」は潮干狩前の光景で、朝方の氣分が現れてゐる。

3「舟は間もなくとまつた。船頭がさををつき立てて、それをつないだ。さうしてさをの先に、赤いしるしのあるはんてんをしばりつけて、

『皆さん、これが目じるしだよ。』

これは潮干狩の常例で、潮干狩をしてゐるうちに自分の舟を見失ふからである。

4「おとうさんも、にいさんも、丸山君も、妹も、お松も、みんな下りた。」こゝに同行者の頭が見え、作者を合せて一行六人であることがわかる。お母さんが留守

をしたことは文末の手紙に明かてある。

5　「小さい熊手て砂をかくと、おもしろいやうにあさりが出た。」から「妹やお松は何があつたのか、笑ひながらしきりに取つてゐる。」までは潮干狩そのもの寫生て、本文の中心點てある。

6　潮干狩として作者を中心とした所は次の箇所てある。

あさり――小さい熊手て砂をかくと、おもしろいやうにあさりが出た。

蛤――時々手ごたへがして大きな蛤が出た。

かれひ――淺い水たまりを歩くと足のうらがぬるりとした。おさへて見たら、小さなかれひてあつた。

「丸山君、かれひだ。」

と言つて、つかんて見せると、ふりかへつたのは知らない人てあつた。

7　潮干狩に來てゐる人としては

舟て來た人も、をかから來た人も入りまじつて、何百人か數へきれない程ゐる何時か知らない人とも話し合ふやうになつて、大きな蛤や馬刀貝ても取ると、おたがひに見せ合ふ。女の人はたすきをかけて、手ぬぐひをねえさんかぶりにしてゐる。妹やお松は何があつたのか、笑ひながらしきりに取つてゐる。

8　獲物には

めい〳〵ざるをかしげて、え物を見せ合つた。妹とお松のざるには、やどかりがたくさんゐた。珍らしかつたのは、丸山君のざるに、たつのおとしごが一つあつたことてあつた。

作者の獲物は書いてないが、前記の蛤、あさり、かれひ、馬刀貝等てあつたのてあらう。

9　潮の干滿については

イ　川口近くなると、潮干狩の舟がいくそうもよつて來た。潮がずん〳〵下がるので、舟はすつと進んて、たちまち海へ出た。

ロ　だん〳〵潮が引いて、もう其所此所に洲が見え出した。

ハ　潮がすつかり落ちて、海はをかのやうになつた。

ニ　其のうちに潮がさしはじめたので、みんな舟にもどつた。

ホ　潮がだん〳〵さして來て、何時の間にか洲が見えなくなつた。船頭はさを

ぬいた。舟は上げ潮に乘つて、をかの方へ動きはじめた。川口にかゝつた時ふりかへつて見たら、もう廣い海には誰もゐなかつ　。

最後の「川口にかゝつた時ふりかへつて見たら、廣い海には誰もゐなかつた」は「舟で來た人も入りまじつて、何百人か數へきれない程ゐる」に照應して、滿潮時における海の廣さが想像せられる。又「川口近くなると、潮干狩の舟がいくそうも來た」にも照應してゐる。

10　手紙としては、人に物を贈與する場合は、なるべく良きものを選擇して贈ること、それから署名の正男（長上又は親しき間では名前だけ書くこと）宛名叔父上樣（長上に對しては代名詞で書き、敬稱として、、上樣と書くこと）及び日附を署名の眞上に書くべきことを授げたらよからう。

指導計畫

1　潮干狩の經驗のない兒童が多いのであるが、本文を通讀させると、未知の世界であるが、表現上からして間接的に面白く感ずる點を發見するであらう。此の點を端緒として本文の讀解並に鑑賞を發展させるやうにしたい。

2　潮の滿干等の理由等は兒童の疑問に應ずる程度にするがよい。それよりは潮干狩そのものゝ興味を中心として鑑賞させるやうにしたい。

3　經驗のない兒童には潮干狩のほんたうの興味は起らないであらう。故に教師は挿繪・繪葉書寫眞談話等により之を具體化して行くことを忘れてはならぬ。

4　それから文章に現れてゐるあさり・蛤・馬刀貝・かれひたつのおとしごやどかり等の貝殼または彩色した繪畫を用意する必要がある。

5　文章としては研究欄に示したやうな表現上の妙所をよく味はせると共に、作者が如何に銳敏なる目で觀察してゐるかを考へしめて、創作指導の一助としたい。

6　本文を透して場面の變化を讀破させて、潮干狩の光景を想像させるやうに指導することも大事である。

岸――大川――川口――海――洲の見え出した海――をかになつた海――潮のさしはじめた海――潮のさした廣い海

7　長篇であるが、なるべく全體的に學習させて行きたい。部分を取扱ふにし

ても、常に全體を背景とさせることを忘れではならぬ。この種の文の面白味は全體を見ることによつて、一そう深められるものである。

8　語句には理解を確めておかなければならぬものが少くない。もや・こめて・ゐるうすら寒い・不意に・うかがつたら川口・たちまち・合唱・潮が引いて・其所此所・おしたく・はしよつた・目じるし・手ごたへ・水たまり・おたがひ・むされるやうな氣がする・ねえさんかぶり・しきりに・潮がさしはじめた・かしげて・上げ潮等は解釋上特に注意を要する。

9　文字にも多畫な漢字が多い。岸・潮・干・狩・唱・洲・繊・妹・蛤・珍等何れも書取には困難な文字である。それだけ練習が必要である。

時間　約四時間

準備

潮干狩の行はれない地方では挿繪よりもつとよく分かる潮干狩の寫眞又は繪畫。

蛤・あさり・馬刀貝・やどかり・たつのおとしご等の標本又は實物。

參考

文字の讀方

潮干狩（しほひがり）。大川（おほかは）。舟の中（ふねのなか）。川口近（かはぐちちか）く。下（さ）がる。明（あか）るく。洲（す）。海へ下（おり）た。誰（だれ）。うち中（ぢゅう）。

語句の意義

【もや】（霧）空氣中に水蒸氣のもや〳〵として立ちこめたものを云ふ。霧といひ、霞といふも皆一種のもやのことである。

【水の上をこめて】「こめる」は中に入れ包むこと、卽ちこゝでは水の上をもやが包みこめた意である。水の上の凡てのものがもやに包まれて見えない有樣である。

【うすら寒い】少し寒い、稍〻寒いといふ意。

【不意に】思ひがけなく。

【うかゞつた】聞いた、尋ねた。

【潮がずん〳〵下がる】干潮になつて水面がずん〳〵低くなること。

【すつすと進んで】氣もちよく早く進む有樣。

【たちまち】すぐに見てゐるまに。
【合唱】聲を合せてうたふこと。
【洲】砂地。
【着物のすそをはしよつた】着物の裾の端を折つて帶等にはさむこと、端を折るのをつまつたのである。
【はんてん】羽織に似てゐるが襟をかへさず、まちもなく、半襟をかけるのが普通である。
【手ごたへ】手にこたへること。
【潮がすつかり落ちて】潮がすつかり引いてしまつて。
【をか】陸。
【ひされるやうな氣】暖か過ぎて、ボーッとしたやうな氣持になること。
【ねえさんかぶり】田舍の女が手拭をよくかぶるやうなかぶり方（挿繪で見ると下女のお松のかぶり方）
【潮がさしはじめた】潮が滿ちはじめた。
【かしげて】傾むけて。
【上げ潮】滿潮又はさし潮といふ。
【よつた】選んだ。

第五　れんげさう

主眼

春の日光を浴びて、田畑といはず、道ばたといはず、石垣の間、えんの下にまでも一めんに春をかざるれんげさうの美しさと、優しさとを感得させたいと思ふ。

研究

1　れんげさうについて、之を美的に眺めた説明的の文章である。短篇である のがれんげさうによく調和してゐる。

2　各文段の文脈の關係は次のやうになつてゐる。

一　此の頃はれんげさうの花さかりである
　　四角な田には四角に細長い田には細長くれんげをしきつめたやうに見える
　　麥畠やなたねの間に咲いてゐるのはことに目立つて美しい

二　しやうの強いもので、一度種が落ちれば、年々其所で花が咲く
　　道ばたや土手に咲いてゐるのはこぼれ種であらう
　　石垣の間
　　地藏樣のかげ
　　辻堂のえんの下　てもさく

三　色が美しい
　　姿がやさしい　つみ草の時には、誰も之を取つて花たばにする

3　説明的の文章であるが、表現は餘程工夫されてゐるから、れんげさうの美しさ愛らしさがよく現れてゐる。中にも次の如き表現は讀者をひきつける。

四角な田には四角に、細長い田には細長く、田の形其のまゝに紅紫のもうせんをしきつめたやうに見える。

れんげさう畠の形の美しさを書いたものである。

麥畠やなたね畠の間にさいてゐるのは、ことに目立つて美しい。

麥や菜種と色の配合の美を書いたものてある。

道ばたや土手にさいてゐるのはこぼれ種てあらう。

と述べて來て、れんげのしやうの强いものてあることを說き

石垣の間ても、地藏樣のかげても、辻堂のえんの下てもさく。

と疊みかけて書いた所に、れんげのしやうの强さが現れてゐる。

色が美しい上に、姿がやさしいので、つみ草の時には、誰も之を取つて花たば

にする。

本課の中心點が此の一文によく現れてゐる。

指導計畫

1　短篇てもあり、新出漢字もなく、語句も難解なものがないから、讀解は比較的容易てあると思ふ。殊に兒童に愛好せられるれんげさうてあるから兒童は一氣に讀んて終ふと思ふ。

2　しかし、それだけては、本課の意味が漠然としてゐて中心點が明瞭てないから、文段毎に文脈關係を吟味させて、その意味を的確に把捉させたいと思ふ。

（研究欄參照）

3　慾を言へば、本文の如きは說明文とせず、寫生文としてほしかつた。そこて本課學習指導の前後適當な機會に校外學習によつて、れんげさう畠を觀察させ、れんげさうについて創作させて見たい。兒童のれんげさうに對するほんたうの心持がわかるてあらう。さうすれば本課の缺を補ふことが出來ると思ふ。

4　本文は繪畫表現の指導をなすには適當な課てあると思ふ。今繪になる箇所をあげると

四角な田のれんげさう
細長い田のれんげさう
麥畠やなたね畠の間にさいてゐるれんげさう畠
道ばたや土手にさいてゐるれんげさう
石垣の間、地藏樣のかげ、辻堂のえんの下のれんげさう
れんげさうの花たば

5　讀解上注意を要する語句は、花ざかり・田の形其のまゝ・ことに・こぼれ種・しや

う等てある。

時間　約二時間

準備

先づ郊外へつれ出して春の野を觀察させて置く、その機會がない場合は春の野の繪書、れんげさうの實物。

參考

文字の讀方

麥畠（ムギバタケ）やなたね畠（バタケ）。目立（メダ）つて。土手（ドテ）。こぼれ種（ダネ）。一度（イチド）。年年（ネンネン）。其所（ソコ）。

語句の意義

【こぼれ種】人がまいたものでなく、自然に落ちた種。

【しやうの強い】（生の強い）生命力の強い、なかなか容易に死なないものといふ意てある。

【辻堂】辻の傍に建てられた佛堂てある、辻は四ッつじ。

第六　鎌倉攻

主眼

味方の苦戰も、海陸相並んて守る賊の防備もものかは、唯一念聖天子の御爲に祈願し、黄金作の太刀を海中に投じて進路を開き、一擧に鎌倉を攻落した名將義貞の忠勇に感ぜしめたいと思ふ。

研究

1　稻村崎において新田義貞が劒を海中に投じて、賊を撃破つた奇蹟を中心とした叙事體の文章てある。

2、名將義貞の忠勇は本文の各所に現れてゐる。その要所は

イ　「極樂寺坂の味方があやふうございます。」といふ使が來ても、「大將も討死されました。」といふ注進があつても「總大將新田義貞はびくともしません。」そして二萬騎を引具して之に向つた。

ロ　稲村崎に着いて見ると

北の山手―木戸を立てゝ數萬の兵が守つてゐる

南の海上―ひし〳〵と軍船を浮べて岸には大木がきりたふしてある

海陸共に鎌倉に攻め込む隙がない。この防備を見た將卒の胸中は少からず動搖したことてあらう。

ハ　この形勢を見て取つた義貞は忽ち「馬から下りてかぶとをぬぎ、はるばると海上を拜しました。さて、心の中に、義貞今天皇の御ためにいくさを起して、賊臣北條をほろぼさうとしてゐます。海神ねがはくは潮を退けて、道を開かせたまへと念じて、黄金作の太刀を取つて、海中に投入れました」これを義貞の機智とばかり思つてはいけない。海水を退けることは當時の義貞の何よりの念願てあり、黄金作の太刀を投じたのはその忠誠の現れてあつたのてある。

ニ　其の夜潮の引くのを見た義貞は「ものども進めと其の遠干がたを眞一文字に鎌倉に攻めこみました。賊のそなへは忽ちくづれて、防ぐにも防がれず、たゞあわてさわいてゐます。」義貞の機敏さを見ることが出來る。

ホ　鎌倉へ攻入つた義貞は少しの間隙を與へず、「方々へ火をかけさせます と、濱風が之をあふり立てたからたまりません。鎌倉は一面火の海になつて、賊の大將高時以下北條方は、此の火の中にほろびてしまひました。」義貞の名將たる所がよく現れてゐる。

3　勇ましい戰記文てあるから、要所になると現在法が用ひて、事件を活寫してゐる。

總大將の新田義貞はびくともしません。

北の山手には木戸を立てて、數萬の兵が之を守つてゐます。又南の海上にはひしひしと軍船を浮べて、岸には大木がきりたふしてあります。鎌倉へは海陸ともに攻めこむすきがありません。

賊のそなへは忽ちくづれて、防ぐにも防がれず、たゞあわてさわいてゐます。

4　起首に「極樂寺坂の味方があやふうございます。」といふ使の後から、「大將も討死されました。」と書き出したのは、一つは突如として使者の言葉から書き起したポット出主義の文章てあり、一つは漸層的の表現て、味方の軍の苦戰を具象的に現はしたものてある。

指導計畫

1　義貞の誠忠神に通じて、海水が干たといふ神秘な點はどこまでも神秘として兒童の心に印象づけ、一種の嚴肅な氣分にひたらせたい。

「さういふことが實際あるだらうか。」といふやうな知的の判斷を起させないやうに取扱ひたい。若しそんなことをいふものがあつた時には昔あつた話だと輕く過して餘り穿鑿に陷らぬがよい。そんなことを問題にしてゐると本課の生命は全く失はれてしまふ。

2　文を透して義貞の名將たる所以を充分に偲ばせたい。その要所は研究欄に示してゐた。

3　卷六の千早城と連絡して學習させると相互に史的關係が明瞭になる。本課の學習には、是非卷六を參照させたい。

4　義貞の鎌倉へ攻入つた戰況地圖や、稻村崎邊の寫眞等を利用して本文の理解を助けねばならぬ。

5　文章は戰記文として尙ばれる太平記の文脈をよく傳へてゐるから、翫味的の取扱をなして、洗練せられたる語脈の妙味を味はせるやうにしたい。

6　本課には讀解の支障になる語句がかなり多い。鎌倉・極樂寺坂・稻村崎等の地名をはじめ、味方・あやふう・びくともしません・手もとの軍ぜい・たゞちに・此方・そなへ・山手・木戸・ひしひしと・軍船・攻めこむすき・はる〳〵・賊臣・ねがはくは・道を開かせたまへと・念じ・黃金作の太刀・干上つて・ことごとく・遠干がた・ものども・進め・眞一文字・賊のそなへ・防ぐにも防がれず・あふり立てたから・一面火の海・高時・以下等特に指導に注意を要するものである。

7　文字にも總・鎌・倉・臣・開・滿・眞・忽・防等の新字及び死・此方・數・浮・起等の讀替文字がある。文字の負擔も少くない。「滿」は滿の新字形で入が人になつてゐる。

準備

義貞鎌倉攻の地圖、又は鎌倉附近の地圖。

義貞の肖像。

參考

文字の讀方

鎌倉攻。使の後から。此方。北の山手。木戸。軍船。大木。馬から下りて。海神。念じ。太刀。干上つて。砂地。遠干がた。眞一文字。

語句の意義

【あやふう】あぶなく。

【びくともしません】一寸も動かぬ、泰然たること、少しも驚かぬこと。

【そなへ】防備。

【木戸】城戸の意であらうといふ、(一)城門(二)轉じて通路にある門を云ふ、こゝては(二)の意であらう。

【ひしひしと】「ひしと」は緊しく壓されて鳴る聲にいふ語、ひしひしは緊々又は犇々と書く、ひしひしとつめかけてゐる意。

【はる〳〵と】遙の「はる」を重ねたもの、はるか遠くの意。

【念じ】心の中で祈ること。

【黄金作の太刀】鞘、その他に黄金で裝飾した刀。

【落ちて行く潮にさそはれて】引いてゆく潮につれられて。

【ことごとく】すべて、みんな。

【ものども】部下の士卒。

【遠干がた】遠くまで干がたになつた所。

【眞一文字】眞直に、一直線に。

【あふり立て】吹き動かす、ひるがへす、吹き立てる。

【火の海】火の盛んにもえひろがつたことを海と暗喩した、人の山を築くなどと同じ修辭。

【以下】何々をはじめとし其の他と云ふ意。

第七　傘松

主眼

この文を讀んで傘松――その下の雨ざらしの地藏尊、一軒茶屋――それは一人ぼつちのおばあさんが一人むすこを南米へ送つて留守をしてゐる、まんぢゆう笠をふせたやうな塚――そこに馬頭觀世音の石碑がある。さうしたものに情趣を感じて、本文を創作した作者の心持を味はせたいと思ふ。

研究

1　作者はこの村の或る小學生であらう。作者は毎日この傘松の下を通り、地藏樣の前を通り、茶屋のおばあさんを見かけ、饅頭塚のところで馬頭觀世音の文字を讀み上げながら村の小學校へ通つてゐるのであらう。そうしてその終始觀察してゐるところを書いたのである。

2　これは村はづれの道端にある三つのものを題材にとつたのであるが、それはこの子供にかうした物象事象に趣味の眼を以て見る態度が出來てゐたからである。眼前に展開せられるものすべてが精神內容となるものでない。廣く深く事物を見て生活を擴充することが文章指導の極意である。

3　「村の西にくぬぎ林がある。それを通りぬけて四五町上ると、道ばたに大きな松が一本ある。」は村を元にして傘松の位置を示したものである。「傘松の四五間さきに、小さな茶屋が一軒ある。」は傘松を元として茶屋の位置を明かにしたものである。また「茶屋から二三町行つた所の右手に、まんぢゆう笠をふせたやうな塚がある。」は茶屋を元にして塚の位置を示したものである。村を元にして傘松、傘松を元にして茶屋、茶屋を元にして塚と相關的に位置を明かにして、三つの題材を統一してゐる。

4　各題材の要所を表記すると次のやうになる。

傘松（みき―二かゝへもある
　　枝―傘をひろげたやう）
（晒木綿のづきんをかぶ〻

地藏尊
雨ざらしになつてゐる
何時も花が上つてゐる
時々線香が上つてゐる

茶屋
おばあさん―一人ぼつちで菓子やわらぢを賣つてゐる
むすこ―一人あるが南アメリカへ行つてゐる

まんぢゆう塚―馬頭觀世音の石―新しい馬のくつ

5 かういふ題材は全く興味―趣味の問題である。かういふものに面白味を感ずる、それが根本の問題である。幹が二かゝへもある太い松、そして枝の形が傘をひろげたやうだとは、先づその形が珍とするに足る。その上その松の下には地藏樣が立つてゐる。ちやうど傘松を屋根のやうにして、晒木綿の頭巾をかぶつてゐるが雨ざらしである。何時も花が上つて、時々線香の上つてゐることもあるのは、信仰してゐる人があることが想像せられる。又一人息子を南アメリカへやつて一人佗しく草鞋や駄菓子を賣つて糊口を凌いでゐるおばあさん、かうした一軒茶屋も趣の深いものだ。まんぢゆう笠の形をした塚、馬方が新しいくつをあげる馬頭觀世音などまた捨て難いものである。

指導計畫

1 この種の文章では一讀興味を感ずることは、普通の兒童には至難なことである。故に先づ題材を明確に掴ませるやう讀解の指導に指導力を注ぐべきである。

2 文章に表現せられてある各題材が大體明かになつたら、その位置を文章上から研究させて、三つの題材が一文として統一ある點を研究させるがよい。さうすると各題材が地理的に明かになつて、村境の靜寂な場面を想像させることが出來るであらう。

3 讀解が大體出來るやうになつたら、自由讀によつてしんみりと何回か繰り返して讀ませるがよい。かくして讀む中には傘松や地藏樣、一軒茶屋、それから饅頭塚などの姿が次第にはつきり映つて來るであらう。

4 各題材の姿が映つて來たら、更に題材の一々につき仔細にその姿を吟味させて見るがよい。大抵の兒童なら其處に面白味を感ずるであらう。これが兒童には未知の世界を發見させたことになるのである。

5　かくの如き指導をして兒童の生活を目覺させると、今まで兒童の眼には見えなかつた物事まで見えて、それに興味を感じ、やがては趣味を有つやうになる。これが指導の極致である。

6　若し兒童が本文に刺戟せられて創作的動機を起し、文章創作をなすものがあつたら、なるべく多く之を學級兒童に紹介して、本課學習指導の目的を徹底するやう利用するがよい。

7　小さいことであるが、一軒茶屋の息子の行つてゐる南アメリカは第一世界の課の挿圖を參照させるやうにする。

8　讀解の支障となる語句は、道ばた・二かゝへ・晒木綿・雨ざらし・一人ぼつち・まんぢゆう笠・ふせた・馬頭觀世音・馬のくつ・馬方等である。

9　文字としては「傘」と「笠」の意味の比較、「茶」「菓」の字形に注意を要する。

「菓」は「果」とよく混同される漢字である。

時間　約三時間

參考

文字の讀方

くぬぎ林。四五町上ると。傘松。二かゝへ。雨ざらし。花が上つてゐる。

一人ぼつち。馬方。

語句の意義

【道ばた】道のそば。

【二かゝへ】兩手を廣げた廣さの二倍。

【晒木綿】晒して色を白くした木綿。

「雨ざらし】雨にあてられてゐること、屋根等のおほひがないこと。

【花が上つてゐる】花がそなへてある。

【むすこ】男の子、親に對していふ語で、親を考へない時の男の子をばむすこと

は云はぬ、相對語である。

【まんぢゆう笠】まんぢゆうの形をした笠。

【塚】（築の轉といふ）土を小高く築きて墓としたもの、一般に墓をもいふ。

【馬のくつ】藁で作つたもので馬にはかすわらぢ。

【馬方】馬子、馬引き。

第八　馬

主眼

馬についての常識――乘用または役用として使ひ道の多いこと、殊に戰時には極めて大切な役目をすること、馬の高さの測り方、我が國の馬が近時良種に改良せられて來た等を學習させることが要點である。

研究

1　馬について各方面より說述した文である。

2　文の想を表記して見よう。

- 1　大そう元氣がよい―生れた日からすぐ歩く
- 2
  - 走ることが早い―乘用として第一
  - 力が強い―荷物をつける
    - 荷車をひかせる
    - 耕作に使ふ
  - 戰時に大切なもの
    - 乘用として
    - 輸送用として
  - 武人は昔から之を愛養して、戰時に乘つて出た
    - 畠山重忠―ひよどりごえのさか落しに馬をしよつた
    - 乃木大將―煉瓦造の小屋に大切に飼養された
- 3　馬の高さのはかり方
  - 前足の所ではかる
  - 八寸・九寸……四尺八寸・四尺九寸の意
  - 十寸……五尺の意
  - 十寸・一寸・十寸・二寸……五尺一寸・五尺二寸の意
- 4　我が國產馬の改良
  - 西洋諸國におとつてゐた
  - 近年、外國から種馬を輸入して良馬が多くなつた
  - せいが低く
  - 體格もおとつてゐた

指導計畫

1　抽象的說明であるが、文章が整然としてあるから、文意を正確に把らせる訓練をする、これが讀解指導の要領である。

2　今讀解上特に指導を要する所は第二、第三、第四、第五段の文脈關係である。研究欄に示したやうに正確に意味を把らせるやうにしたい。それには語句の成分上の地位を考へて、語法上から論理的に誘導するやうにすればよい。

3　戰時に於ける乘用（主として騎兵――斥候又は追擊の場合）及び輸送用（兵糧・彈藥・機關銃・砲兵隊等）の具體例をあげて、その內容を明かにしなくてはならぬ。

4　畠山重忠及び乃木大將の馬を愛された話もより具體的に說話してやるがよい。これがやがて動物愛護の精神を起させることにもなる。

5　この課殊に愛馬の精神については卷十馬市見物と密接な關係があるから、指導者は一應參照しておく必要がある。良馬の產する所以が明かになると思ふ。

6　新出文字が比較的多いから、文字の指導に力を入れないと讀解が澁滯するであらう。走（足）・荷・耕・爭・愛養（養）・諸等は誤り易い漢字である。乘は乘、近は近の新字形として採られたものである。

7　語句は漢語が割合に多い。乘用・耕作・戰爭・輸送用・武人・愛用・西洋諸國・近年・改良・輸入・良馬等であるが、これ等は字義に關係づけて解釋すると便利である。

時間　約三時間

準備

戰場に於ける軍馬の活動を示す繪畫。大都市では耕作に使用せる馬の繪畫も必要、ひよどりごえのさか落しの繪もあれば一層よい。

參考

文字の讀方

武人（ブジン）。下（オ）りた。練瓦造（レングワヅクリ）の小屋（コヤ）。十寸（トキ）一寸（イツスン）。種馬（タネウマ）。

語句の意義

【乘用】乘つて走るのに用ひること。
【耕作】たがやすこと、田畑の土を堀りかへして作物を植ゑるやうにすること。
【輸送用】物を運ばせるに用ひること、こゝては兵糧、彈藥、兵器、軍服等。
【武人】武士、軍人。
【愛養】愛して養育する。
【いざといふ時】さあ大事といふ時、即ち戰時などをいふ。
【しよつて】背負うてのつまつたもの。
【西洋諸國】歐米諸國。
【わるくてゐる】わるくて負けてゐること。
【體格】身長とか體重とか姿勢とか、身體各部の大小、長短等を總括していつた言葉。
【種馬】種族の改良のために用ふる優良な牡馬で、之を牝馬に交配して優良な仔馬をとるのである。
【改良】いろ〳〵工夫して前のものよりよくすること。

第九　大阪

主眼

我が商工業の一大中心地として殷盛を極めたる大阪市及びそれに隣りて、横濱と共に我國の二大貿易港と稱せられる神戸港の概況を知らせるのが主眼である。

研究

1　大阪を中心として、神戸を之れに關聯せしめて說明した文である。
2　段落と要約
第一段。大阪の今昔――大阪と煙――煙の都と稱せらるれみ給ふ
昔――仁德天皇の都したまひし所――立上る煙少く――民の貧しきをあはれみ給ふ
今――商工業さかん――大工場多く――えんとつの煙空をおほふ

第二段。市中の川と堀――水の都と稱せらる

淀川市中を流る―（いくすぢにも分る――海へそゝぐ／堀が川と川とをつなぐ）

第三段。交通の頻繁

（市中――電車の往復しげく／港――船の出入たえず）

第四段。神戸の概況

（大阪の西十里／一大貿易港／輸出入横濱にゆづらず）

第五段。大阪神戸間の交通

便利なること東京横濱間の如し

3　知的の説明文であるが、第一段では大阪の昔を偲び今の繁盛と對比し、而かも煙の都と稱せられる大阪の今昔を煙と關聯せしめて、比較してゐるところに一種の面白みがある。

第二段は水の都と稱せられる大阪を説いたのである。縱横に水の通じてゐることは卽ち水利を語り、交通の頻繁を言外に説いてゐることになる。

第三段は電車の往復しげく、船の出入のたえぬことは卽ち交通の頻繁、商業の殷盛を言外に盡してゐる。

第四段には横濱と比較して神戸市の概況を述べ、第五段には大阪神戸間交通を東京横濱間に比して密接な關係を述べてゐる。

4　本課は第三「横濱」と關係深き記述になつてゐる。彼は横濱を中心として東京との關係を明かにし、此は大阪を中心として神戸との關係に及んでゐる。

關東に於ける我が國の中心地たる東京、及びその玄關口としての横濱、關西に於ける中心地たる大阪、及びその玄關口としての神戸、對比的に考へると興味が深い。

指導計畫

1　地理的の説明文で、簡潔に記載されてあるから、地圖や寫眞等によつてその理解を助けなければ眞の了解をさせ難いと思ふ。

2　具體化すべき點は次のやうてある。

「仁德天皇の御仁政のこと。」

「商工業サカンニシテ、大工場多ク煙ッネニ空ヲオホヘリ。」

「市中の川と堀と橋及び電車と汽船。」

「神戸ハ一大貿易港ニシテ、輸出入ノサカンナルコト、横濱ニユヅラズ。」

「大阪神戸間ノ交通ノ便利ナルコト、東京横濱間ノ如シ。」

3　商工業都市としての大阪、貿易港としての神戸を知らせるのが主てあることはいふまてもないが、仁德天皇の御仁政について小國民に深い印象を與へて置くと云ふことは、國民的精神の涵養上大切な事てある。

4　文語文の初歩時代てあるからその讀解力養成の上に特に注意すべきてある。新形式のものは

「都シタマヒシ所ニシテ

民ノ貧シキヲアハレミタマヒキ

煙ッネニ空ヲオホヘリ

川ト川トヲツナグリ

電車ノ往復シゲク、船ノ出入タエズ

東京横濱間ノ如シ

5　文語文の所へ新出漢字も少くないため、文章が硬化してゐるから、短文てはあるが讀解がかなり面倒てあらう。文字ては阪（坂）・煙（クムリ）・貧（マヅシ）・業（ゲフ）・場（デバ）・堀（ホリ）・往（ワウ）・復（フク）（腹）・交（カウ）・利（リ）等がある。

6　語句には商工業・大工場・往復・出入・輸出入・交通・便利等てやはり字義に關係づけて理解の伴ふやう解釋するがよい。

時間　約三時間

準備

地圖（阪神地方圖、大阪市街圖、神戸市街圖）

仁德天皇高津の宮御登臨の圖。

寫眞　烟突林立して煙の空をおほふ大阪。

堀川等をあらはした水の都としての大阪。

市中交通頗繁の大阪。

神戸の出入たえざる船舶。

神戸港の大觀。

參考

文字の讀方

都（トヤコ）シタマヒシ。立上ル煙（ケムリ）。民ノ貧（マヅシ）キ。大工場（ダイコウバ）。

語句の意義

【都シタマヒシ所】都としたまうた所。

【アハレミタマヒキ】かはいさうにお思ひ下された。

【空ヲオホフ】空一ぱいに廣がつて青空をかくしてゐる。

【海ニソヽグ】海に流れ込む。

【シゲク】（繁ク）たえまなくはんじやうすること。

【タエズ】たえない。

【輸出入】輸出と輸入。

【ユヅラズ】まけない。

【交通】ゆきゝ、往來。

第十　獅子と武士

主眼

蛇のために一命を奪はれやうとした獅子があやふく武士に助けられ、その恩義に感じて日夜武士につき從つてゐたが、やがて武士と別れねばならぬことになつた時、武士を慕ふの餘り遂に一命を捨てたといふ哀れな物語である。兒童が之を讀んで獅子の心根に同情の涙を催し、その憐れな最期に同感するやうに導きたいと思ふ。

研究

1　獅子が一命を武士に助けられて、その恩に感じて武士の從者となつたが、武士歸國する時同伴を許されず、終に船に泳ぎつかんとして入水して最後を遂げたといふ哀れな物語を、時間の順序に叙した模範的の叙事文である。

2　蛇が獅子にまきつく樣、獅子のおどろき苦しむ樣は共に漸層的に叙述して

あるから、その情景が活躍してゐる。

昔一匹の獅子、森の中にて眠りしに、後の暗きやぶかげより大いなる蛇つと出でて、獅子のからだにまきつきたり。獅子はおどろきてふりはなさんとしたれど、蛇はます〳〵かたくしめつけたり。獅子の目は火の如くもえ、怒りてさけぶ聲には、百獸おそれてにげまどへど、蛇はます〳〵強くしめつけたり。今や獅子の息はたえんとす。

即ち

蛇
- まきつきたり。
- ます〳〵かたくしめつけたり。
- ます〳〵強くしめつけたり。

獅子
- おどろきてふりはなさんとす。
- 目は火の如くにもえ、怒りてさけぶ
- 聲には、百獸おそれてにげまどふ。
- 今や息はたえんとす。

3 「武士の馬はおどろきて、後足にて立ち上り、おそれて其所に近づかんともせず。」は獅子の苦悶せるさまを側寫したものである。

4 武士が蛇を打倒す所は、叙述よく緊張して、彈力に富める表現となつてゐる。

「武士は太刀をぬきて馬よりとび下り、滿身の力をこめて、蛇の胴中目がけて打下せば、蛇は眞二つとなりて、大地にのたうちまはつてたふれたり。」正にこれ撼天動地の活劇である。

5 「獅子はうれしげに一聲高くほえたてがみをふるひ、四足をのばして後、しづかに近よりて武士の手をなめたり。」の描寫は獅子の歡喜と感謝とを表はしたのである。かくてこそ「獅子は日夜武士につきしたがひてはなれず、武士には無二の從者となれり。」の説明が生きて來る。

6 武士歸國せんとするや、獅子は武士に從ひて行かんとしたが、許されず、船は港を出てしまつた。之を見た獅子の心中はどんなであつたであらう。

「獅子はかなしげにほえて、濱べに立上りしが、つと海の中にをどり入つたり。船におよぎつかんとてなり。されどかなふべくもあらず。獅子は武士の方を見まもりて、あはれ、波の底に入りぬ。」乘船を許されず、今は泳ぎつくより道なしと、入水したが及ぶべきことでない。獅子は悲しくも武士の方を

見守りて、海底深く沈んだ。誠に哀れに滿ちた物語である。

7　本文の最後は唯「獅子は武士の方を見まもりて、あはれ、波の底に入りぬ。」と唐如として終筆してあるから、一そう獅子に對する哀れさが感ぜられる。

指導計畫

1　文語文として第四回目であるが、その形式が餘程むづかしくなつてゐるから、本課の指導としては、此の文語文の讀解から着手しなければならぬ。

2　しかし、その指導に先立ち、先づ全文を數回通讀させて、大體話の筋を掴ませ、此の話を明瞭にするため文語文を讀解させるやう指導する。

3　讀解の困難なものをあげると、
獅子はおどろきてふりはなさんとしたれど。
しめつけたり。獅子の息はたえんとす。
近づかんともせず。
大地にのたうちまはりてたふれたり。
したがひて行かんとせり。

わかれざるを得ざることゝなりぬ。
をどり入りたり。およぎつかんとてなり。
されどかなふべくもあらず。

4　本文の題目は獅子と武士であるが、獅子が中心人物であることはいふまでもない。したがつて獅子が武士の恩に感じて死もいとはず附き從つたその心根に感動させて、百獸の王にも此の優しき美しい心根のあることを悟らせたい。

5　讀解が出來たら、なるべくその場面を想像させて、その情景を具象化して味讀するやう指導したい。

6　文字には眠（眼）・怒・獸・滿・無・從・幾・得・底等が注意を要する。

時間　約四時間

參考

文字の讀方

後の暗きやぶかげ。此所に來りしは一人の武士。其所に。太刀。とび下り。

胴中。打下せば。眞二つ。大地。一聲。四足をのばして後。

語句の意義

【つと出てて】急に出て來て、不意に出て來て。

【逃げまどふ】あまりおそれあわてて、にげる方向も、道も分らなくなること、にげまよふ。

【今や】今ははや、今にも。

【滿身の力】ある限りの力。

【胴中】胴の中程。

【眞二つ】丁度まんなかから二つになつて。

【大地】地面。

【のたうちまはる】「のたうつ」は「ぬたうつ」に同じ「ぬた」とは猪の臥所のことで、其の上に臥すことを「ぬたうつ」といふのである。それから轉じて、俚語では轉顚の意に用ひる。それで、「うねりころがる」とか、「もがき廻はる」などの意となつてゐる。

【日夜】夜晝。

【無二】またとない、二つとない。

【從者】けらい。

【もとより】いふまでもなく、無論。

【をどり入る】とび込む。

【かなふべくもあらず】叶ふ筈がない。

【あはれ】かはいさうに。

【波の底】水の底、海の底といふに同じ。

第十一　初夏の夜

主眼

この詩を讀ませて農家に於ける初夏の夜の涼しい情景を味はせて詩趣を養ひたいと思ふ。

研究

1　田舍にすむ作者がよく晴れた初夏の夜、涼しい夜風に吹かれながらうたつた詩であらう。

2　詩の想を散文であらはして見よう。

あぜ道をつたつて吹いてくる風も、若葉のよいにほひがかほつてくるし、空一ぱいに出てゐる星は皆涼しげに金色に美しくぴか〳〵とかゞやいてゐる。

附近の田は一面に水をたゝへて、白く、廣々としてゐる。そこにはがあ〳〵と蛙の鳴き聲もにぎやかに聞える。又向ふの谷あひの家では窓を明けはなつて涼んでゐる。

あゝもう夜涼みをする夏は來たのだ。

3　七五調で、文語、而かも雅言の混じてゐる叙景詩で、今迄にない高雅な而かも優美な詩である。「空一ぱいの」と「涼しく金に」の二句は稍〻幼稚な筆つきであるがその他は調子の高い詩である。

4　「若葉のにほひかんばしく、」とか「夜に親しむ時は來ぬ。」等は高雅な表現だが兒童にはそれだけむづかしい詞つきである。

星が光つてゐると言はずして、「またゝく」と云つてゐるのもさうである。

指導計畫

1　語句にはやゝ耳なれぬものもあるが、自由讀數回させておけば、此の詩から來る何等かの氣分に打たれるであらう。此の氣分を確かにつかませることが頗る大事なことである。

2　「涼しさうだ」とか、「樂しさうだ」とかいふ氣分を感じたならば、此の感じを

深めるため、初夏の夜の景色を想像させるやうにする。

3　その景色の想像に支障を來す語句は、此の際その意義を明瞭にさせるがよい。「なはて」とか「かんばしく」とか、「またゝけり」とか「田の面」とか「夜に親しむ」とかの難語句は詩に即して、その意味を明かにする。

4　農村の子供は容易に詩の情趣を味ひ得ることが出來るが大都市の眞中等に於てはこんな景色は一寸想像に困るであらう。繪畫等を用ひて補ふよりは方法がないと思ふから、旅行等して田舍の夏を經驗する時機までは間接の教師の指導によつて之を補つておく。

5　朗讀は此の種の詩を玩味させるには適切であるからその回數を多くし、自然の諳誦に導くがよい。

6　「田の面」「夜に親しむ」等の讀み方、若・凉・蛙・窓等の書き方は注意を要する。

時間　約二時間

準備

都會地に於ては、詩にあらはれるやうな景色を描いた繪畫。

參考

文字の讀方

初夏の夜。金に。田の面。蛙。夜に親しむ。窓明けて。

語句の意義

【なはて】（畷）田と田の間の道、即ちあぜ道である。

【かんばしく】（馨しく）「かうばしく」の音便「かうばし」は古言の「香細し」の音便である。「細し」は「細戈」「花細し」「名細し」などの「細し」で備つて美しいことにいふ。「香ぐはし」はよいにほひがするといふ意である。

【金に】金色にの意味である。

【またゝく】（目叩く）めばたきする意、即ち閃く意に用ひる。

【田の面】田の表面。

【水の廣々と】水が廣々として。

【谷あひ】谷の間、谷間。

【夜に親しむ】夜を樂しく思ふ、夜をなつかしく思ふ。

第十二　大連だより

主眼

かういふ手紙を兒童自身が受取つたやうな心持となつて讀ませ、研究させ、之れによつて滿洲の門戸たり、我が南滿經營上の中心都市たる大連の概況を知らせると共に、祖國の爲めに血を流した幾多勇士の地下に眠れる附近の戰跡を偲ばせたいと思ふ。

研究

1　對者關係

發信者は大連中學校の二年生良助君で、故郷に居る友、愛作君に大連の狀況を知らせた手紙である。良助君は二三ヶ月前（卽ち年度がはりの際）こゝに轉任して來た官吏か軍人か教員の子であらうと思はれる。然しこの文では勿論はつきりは決定出來ぬ、或は商人の子かも分らぬ。

2　要件

轉住してからもう七八十日、大連の樣子も大分わかつて來たので友人の情として、その異郷の有樣を知らせようと思つてかいたのであらう。中心點は大連の概況と、旅順の戰跡をたづねたことゝである。

3　之を今少し詳しく表示して見よう。

大連へ來てから七八十日、町のやうすがわかつて來た（前文）

- 市街
  - 通
    - 廣くて平
    - 歩道と車道
    - 並木が植えてある
  - 目ぬきの所
    - 三階建・四階建の石造や煉瓦造の家
    - 日本の町より西洋の都會に似てゐる
- 人口—十一萬
  - 日本人—五萬人
    - 年々ふえる

町名—大山通・乃木町・奥町・兒玉町（日露戰爭時の大將方の名）

- 大連
  - 内地からの航程
    - 神戸から三晝夜
    - 門司から二晝夜
  - 港
    - 波止場
      - 第一
      - 第二
      - 第三
      - たくさんな大船を一どに横づけにする
    - 陸上との連絡―陸上げした荷物はすぐ汽車で各地へ送る
    - 貿易
      - 輸出品――豆粕が第一
      - 輸入品――綿布が第一
  - 氣候
    - 思つたよりよい
    - 快晴の日が多い
  - 大連から汽車で一時間
- 旅順
  - 白玉山上の表忠塔
  - 二百三高地

（本）（文）

（支那人―六萬人

後便で又申上げる……（末文）

4　六月十五日の日附は良助が大連へ行つた時期四月の新學年頃を推定する標準になる。

5　署名及び宛名は懇意の間柄においては良助・愛作の如く名前だけ書くことがある。名前だけの方が親密の情がよくうつるものだ。「君」は朋友間に用ひる敬稱である。

指導計畫

1　この文章は方便的のもので、大連旅順についての通信が主眼で、書翰文として指導すべき點は署名と宛名と敬稱位である。

2　故に何等問題や方法を與へることなく、素直に讀ませたら、兒童の多くは書翰文として研究せず、必ずや大連旅順を研究對象とするであらう。これ自然の讀書で、誠に尊い讀み方である。兒童は教へなくとも教材の主眼とする所を、讀むことによつて、よく把握し得るものである。指導者はこゝに着眼して教材卽ち文章に卽しての學習法を發見させるやう努力しなければならぬ。

3　大連の町名に日露戰爭時の大將方の姓を附けてあることゝ、旅順の表忠塔や二百三高地の記事から、大連旅順の地を如何にして租借したか、その沿革の大體を補說する必要がある。

4　市街の壯麗さや、港の殷賑さを明かにし、滿洲の玄關たる位置を考へしめて、わが大陸發展の根據地たることを悟らせて行きたい。

5　地圖・寫眞・繪葉書等を用意して本文を具體化すると共に、本文外の大連旅順を知らせることも大事だ。

6　新出讀替兩文字共に多く提出してある。

新出　連・露・並・建・會・似・那・綿・布・箇・候・快・旅・順・修・忠・塔

讀替　面・本・造・葉・北・京・晴・勇・後・助

右の中書き方の誤り易きは建（健）・似・候・旅・修等で、讀み方では北（ペン）京に注意が必要てある。

7　語句はむづかしいものが割合に少い。歩道・車道・目ぬきの所・波止場・陸あげ・貿易商・綿布・豆粕・快晴・修學旅行・忠勇の士・血を流して取つた後便等がその重要なものてある。

時間　約四時間

準備

地圖
- 日本及南滿洲地圖。
- 大連市街圖。
- 旅順附近戰蹟圖。

寫眞又は繪書
- 大連市目ぬきの場所、其の他重なる通り。
- 大連波止場―海陸の連絡の有樣。
- 旅順市街。
- 二百三高地其の他戰蹟。
- 白玉山表忠塔。
- 大山、乃木、奥、見玉の諸將軍の肖像。

參考

文字の讀方

第十二　大連だより（巻七）

大連。大分。三階建。石造。煉瓦造。其の中。來れば。北京。綿布。後便。

語句の意義

【かれこれ】凡そ、約、たいがい。

【歩道】人の歩む道　【車道】車の通る道　大都市の大通では區別してある。

【並木】並べて植えてある木、こゝでは街路樹。

【目ぬきの所】最もにぎやかなところ。

【波止場】船着き場。

【豆粕】大豆の油を搾つたあとの粕で多くは肥料にする。

【綿布】木綿織物。

【快晴】日本晴れ、よく晴れて氣持のよい天氣。

【後便】あとからの手紙。

第十三　一太郎やあい

主眼

年老いた身てわざ〳〵五里の山道を駈けつけて、可愛い我が子と生別する最後の一言として、「うちのことは心配するな。天子様によく御奉公するだよ。」と、只だ一念奉公の至誠を以て、我が子を教訓したこの純樸なお婆さんの、熱烈な奉公の精神に感動させたいと思ふ。

研究

1　日露戰爭時における健氣な婦人の話を叙した文章である。卷九「水兵の母」と好一對の美談である。

2　內容上からは、前課「大連だより」と密接な關係がある。前課は日露戰爭について本課の豫備知識となつてゐる。

3　本文は大體叙述體の文章であるが、その中に說明句が二箇所出てゐる。此

の證明句は本文の象眼とも稱すべきもので、この證明句あるが故に、それが讃景となつて、お婆さんをよく描き出してゐるのだ。起筆の「日露戰爭當時のことである。」と、文末の「聞けば、今朝から五里の山道を、わらぢがけで急いで來たのださうだ。」の二文がそれである。

4　おばあさんの健氣な心は

「うちのことはしんぱいするな。天子樣によく御ほうこうするだよ。わかつたらもう一度鐵砲を上げろ。」

と叫けんだその言葉と

すると、又鐵砲を上げたのがかすかに見えた。おばあさんは「やれ〳〵。」といつて、其所へすわつた。

といふ所に遺憾なく現れてゐる。殊に其の言葉には日本人の魂が宿してゐる。「天子樣によく御ほうこうするだよ。わかつたら鐵砲を上げよ。」何といふ健氣な尊い言葉であらう。思ふに此の言葉は永久に小學兒童否全國民に

5　共鳴せられるものであらう。

此のおばあさんの心持を思ひ起して、次の箇所を讀むと、當時のおばあさんの姿や態度が眼に見えて來るやうである。

軍人をのせた御用船が今しも港を出ようとした其の時、

「ごめんなさい。〳〵。」

といひ〳〵、見送人をおし分けて、前へ出るおばあさんがある。年は六十四五でもあらうか、腰に小さなふろしきづつみをむすびつけてゐる。御用船を見つけると、

「一太郎やあい。其の船に乘つてゐるなら、鐵砲を上げろ。」

とさけんだ。すると甲板の上で鐵砲を上げた者がある。

6　文末の「郡長はじめ、見送の人々はみんな泣いたといふことである。」はおばあさんの赤誠がどんなに熱烈であつたかといふことを證明したものである。八波先生はその著「創作への道」にかう言つて居られる。「此の事實を語つた人も泣きました。聽い人も泣きました。書いた人も泣きました。敎へる方も泣かれませうが、敎はる兒童も泣きませう。一太郎君の母は、彼の「水兵の母」と等しく健氣な日本婦人の代表者です。」と。實に此の話を聞き、此の文章を讀んで泣かないものは日本人でないのである。

7　說明體を採らず、描寫體で進んで、老母の身の上も文末に至つて明してゐるから、一層讀者を引きつけると思ふ。日露戰爭當時、御用船出帆間際の光景が見えるやうだ。

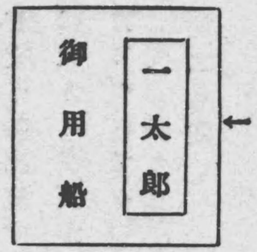
指導計畫

1　「一太郎やあい」、この題目を讀む兒童は、恐らく珍奇な題目と思ふてあらう。此の題目に對する疑問を解決させるやう指導の工夫をなすべきである。

2　かういふ文章を讀ませる場合には、先づその主人公を突きとめておかなければならぬ。さうでないと讀解が澁滯して、どうかすると要領を得ないやうなことがある。老母が主人公であることは本文によく現れてゐるが、その人物關係は次圖のやうである。

おばあさん

郡長その他の見送人



この關係を明かにさせなくてはならぬ。

3　おばあさんの精神に感動させるには、おばあさんの年――六十四五――と、早朝から五里の山道をわらぢがけて駈けつけた點を背景として、「一太郎やあい。其の船に乘つてゐるなら、鐵砲を上げろ。」と一太郎の乘船せるや否やを確め、乘船してゐるのを見ると

「うちのことはしんぱいするな。天子樣によく御ほうこうするだよ。わかたらもう一度鐵砲を上げろ。」

と天子樣への御奉公を絶叫してゐる。その健氣な精神に感銘させなくてはならぬ。又「鐵砲を上げよ。」この警句が此の場合の情景にしつくり合つてゐる。これもおばあさんの眞心から自然に溢れ出た言葉であらう。

4 「又鐵砲を上げたのがかすかに見えた。」おばあさんは『やれ〳〵。』といつて、其所へすわつた。」此の時のおばあさんの心持も考へさせなくてはならぬ。

5 郡長はじめ見送の人々がみんな泣いたのは何故であるかを考へさせ、かくておばあさんの雄々しい奉公の精神が如何に強烈であつたかを想像させるやうにしたい。

6 しかし、此の學年程度の兒童には、到底おばあさんの心持を味讀させることは困難であるから、兒童の分る程度に止めて、徐に兒童の生長の後を俟つべきである。

7 小さい事であるが、郡長は郡役所廢止の結果、今は廢官になつてゐることを示しておく必要がある。

8 練習文で、新出漢字はないが語句には、「當時」「御用船」「今しも」「見送人」「甲板」「御ぼうこう」「かすかに」「やれ〳〵」「わらぢがけ」「郡長」等がある。兒童の學習につれて、その意味も次第に深めて行くやうにしなければならぬ。

時間　約二時間

準備

御用船出帆の光景を描いた繪畫。

參考

文字の讀方

今朝。山道。

語句の意義

【當時】其の時。

【御用船】民間の運搬に使用する船に對して、國家の公用に使ふ船が御用船である。

【今しも】「し」は意を强める助詞「時しあれば」「人しなければ」等の如し、「も」は感嘆の助詞「頃しも」「さてしも」等と云ふ。

「今しも」は「只今」とか「今や」とかいふのと餘りかはらない。

【いひ〳〵】いひながら、幾度かいふこと。

【六十四五てもあらうか】「六十四五である」「六十四五てあらう」「六十四五て

もあらう」等と比較してその相違を知らせるがよい。

【御ほうこう】御奉公、天子樣又は國家のためにつくすこと。

【するだよ】するんだよ、するのだよ等の意で地方の言葉である、これによつて地方色がよく現はれてゐる。

【上げろ】上げよの意、前と同じ。

【かすかに】やつと等の意、船が遠い處にあるからはつきりとは見えないのである。

【やれ〳〵】目的が達せられた時、安心とつかれを感じて發する言葉。

第十四　川中島の戰

主眼

川中島の戰は戰國時代に於ける有名なる戰である。（一）に於ては機敏なる謙信、動ぜざる信玄、龍虎相擊つこの兩雄の風格を偲ばしめ、（二）に於てはこの兩雄が遂に勝敗を決し難く、眞劍の對陣にあたつて、面白き媾和法を設け、不運にして敗れた信玄がよく約束を守つたその男らしい態度に感ぜしめて、武士道精神を味はせたいと思ふ。

研究

一　一騎打

1　「越後の上杉謙信と甲斐の武田信玄が、たびたび信濃の川中島で戰つた。」は本課の序說で、二の「めてたく中なほりが出來た。」に照應するものである。

2　「一騎打」には兩雄の戰國時代の驍將であつたことがよくあらはれてゐる。

今文章關係から吟味すると

ある時謙信が山の手に陣取つてゐると、信玄は兵を二手に分けて、はさみうちにしようとした。

イ　謙信はそれをさとつて、夜の間に進んで信玄の陣へ攻め入つた。（謙信の機敏）

ロ　信玄は不意を打たれておどろいたが、忽ち陣立をかへて、敵を引受けた。（信玄の名將たる所以）

ハ　兩軍は入りまじつて、火花を散らして戰つた。

ニ　謙信は馬に一むちくれて、信玄の本陣に切りこみ、大太刀をふりかざして、信玄に打つてかゝつた。（謙信の膽勇）

信玄は刀をぬくひまがない。ぐんばいうちはてふせいたが、えが折れて、肩先へ切りつけられた。（動ぜざる信玄の態度）

信玄の家來は之を見て、後からやりて謙信をついたが、あたらない。力一ぱいに謙信の馬をなぐりつけた。馬はおどろいてとび上つたので、信玄はあぶない所を助かつた。

2　兩將の名將たる所が對比的に書いてあるので、その性格態度等がよく現れてゐる。殊に急迫せる所になると信玄は刀をぬくひまがない。謙信をついたがあたらない。の如く現寫法を用ひて、事件の活寫につとめ、叙述に少しの無駄がなく、單刀直入的で、本文の內容にふさはしい。

二　中なほり

1　「中なほり」も結構の整うた文章である。四十五頁の「川中島で」から四十六頁の「謙信はこれに同意した」までは起首、それから四十八頁の「上杉方はどつとときの聲をあげた」までは中要、それ以下が結尾である。

2　會話が口語常體になつてゐるから、當時の武士氣質と調和して、文章に彈力がある。殊に

川中島を取ることにしては（どうか）

あれ程の小兵に討たれたのは味方の不運。（である）

の如き省略法、

これは長谷川與五左衛門と申す者、小兵なれどもお相手致す。

川中島は謙信に渡す。

の如き時代語が巧に採入れてあるから、一そう文章が引きしまつて、時代氣分を現はしてゐる。

3 「武田方からは安間彦六といふ大の男が、物の具見事に着かざり、大の馬に打乘つて」は「上杉方からは小さな馬に乘つた小さな鎧武者が一人あらはれて」と對比的になつてゐる叙述で、一種の滑稽味を感ずる。

指導計畫

1 「一騎打」と「中なほり」の二文になつてゐるが、全文を通じて讀ましめ、殊に文の起首「越後の上杉謙信と甲斐の武田信玄が、たびたび信濃の川中島で戰つた。」と「中なほり」の結尾「めでたく中なほりが出來た。」に注意させて、川中島の戰の二活劇を叙したものであることを把握させるやうにするがよい。

2 一は大將同志の活劇、二は勇士同志の組討であることを注意せしめて、戰國時代の戰の如何に男性的であつたかを想はせたい。殊に謙信の機敏にして勇敢なその武者振、信玄の泰然として動ぜざる態度と約束通り川中島を渡した義に堅き精神、「これは長谷川與五左衞門と申す者、小兵なれどもお相手致す」名のつた與五左衞門の雄々しさ等は、本課の中心點であるから、よくその武士的精神を味はせなければならぬ。

3 中部地方の地圖を用意して越後・信濃・甲斐の位置を明かにする。殊に川中島は一そう注意してその位置を確かにする必要がある。

4 朗讀または話方によつて、研究欄に摘記した表現上の美點を味はせて行くことも忘れてはならぬ。

5 本課は一種の戰記文であるから、戰爭にちなんだ語句が多い。主なるものをあげると、陣・はさみうち・攻入つた・陣立・兩軍・本陣・大太刀・ぐんばいうちは・家來・勝負・勇士・組討・物の具・鎧武者・小兵・相手・馬上・兩馬・組しき・ときの聲・木戸・鬼神・味方・敵等である。互に關係づけて理解を確實にしたい。例へば

陣―陣立―本陣　　組討―組しき　　物の具・鎧武者

敵―味方　　小兵―大の男

6 文字としては新字讀替共にその提出が割合に多いが、その中で特に誤り易いのは具（具）・受（受）・陣・鬼等である。讀み方では明・兵（しやうひやう）等に注意を要する。

時間 約五時間

準備

挿繪の擴大圖。中部地方圖。川中島對陣明略地圖。謙信、信玄の肖像。

參考

文字の讀方

一騎打（イッキウチ）。二手（フタテ）。陣立（ヂンダテ）。大太刀（オホダチ）。明日（ミヤウニチ）。大の男（ダイノヲトコ）。物の具（モノノグ）。小兵（コヒヤウ）。止めて（トヽ）。鬼神（キジン）。

語句の意義

【山の手】山に據つた地、山の方（ヤマ）。

【陣】兵士が列ねて隊伍を形づくること。

【陣立】陣のつくり方。

【火花を散して戰つた】劍戟相觸れて火花の散る程の混戰。

【本陣】總大將の控へてをる陣、本營。

【ぐんばいうちは】挿繪の信玄の持てるもの、軍の指圖即ち軍配をするに用ふる具、鐵又は板をもつて、ひらたい團扇形につくり之を漆塗等にして、柄をすげたるもの、軍扇ともいふ。

【組討】格鬪、組みついて殺し合ふこと。

【同意】贊成。

【物の具】鎧。

【鎧武者】鎧を着た武者、武者は武士。

【小兵】小男。

【馬上のまゝ】馬に乘つたまゝて。

【ひんずと組む】ひんずはひずに同じ（無手）念に力をこめて、勢はげしく組むこと。

【ときの聲】多人數のものが一度にどつと揚げる聲。

【無念】くやしい、殘念。

【木戸】（城戸）門。

【鬼神】鬼神（キジン）。

【不運】運のわるいこと。

第十五　カヂ屋

主眼

自分の仕事に一心不亂になつて、トンテンカン〳〵と鎚をふる正直で氣立の優しい鍛冶屋とその子の働き振りに感ぜしめたい。

研究

1　作者は尋四位の子供で、鍛冶屋の近所に住んでゐて、度々仕事場に遊びに行つてゐる。そして鍛冶屋には好感を有つてゐる。

2　作者の眼に映じた鍛冶屋

イ　正直デ氣立ノヤサシイ老人

セイガ高ク、目ガスルドクテ、チヨツト見ルト、コハイヤウデシタガ、イタツテ正直デ、氣立ノヤサシイ老人デシタ。

この文の中心點は圖點を打つた所てある。それは助詞「が」によつて明かてある。

ロ　仕事ニヨク働ク人

「トンテンカン、トンテンカント、毎朝暗イウチカラ、弟子ヲ相手ニ打ツツチノ音ガ聞エマシタ。」は聽覺的の說明。

「一日モ休ンダコトハアリマセン。」は右描寫の補助的說明。

私ハ時々其ノ仕事場ヘ行ツテ見マシタ

鎌ヲキタヘテキタコトモアリマス。
鍬ヲ打ツテキタコトモアリマス。
ナタヲ打ツテキタコトモアリマス。
車ノ輪ヲ打ツテキタコトモアリマス。

これは仕事場における働き振りを列擧して說明したのてある。

何時カ私ノウチノツルベノ金タガガコハレタ時、ツクロヒヲタノンダラ、翌日スグニナホシテクレマシタ。

これは追想的の說明て、仕事に忠實なことを裏書してゐる。

夏ノドンナ暑イ日デモ、アセヲ流シナガラ、日ノクレルマデ働イテキマシタ。

これは側寫的說明て夏の暑い日の働き振りから一年中よく勵いてゐることを想像させ、「日ノクレルマデ働イテキマシタ」は四十九頁の「毎朝暗イウチカラ」に照應する所てある。

3　全文過去的の叙述になつてゐるのは「イカニモ丈夫サウナ老人デシタガ、去年ノクレニ死ンデシマヒマシタ。」からてある。唯純說明の部分だけ現在法を採つてゐる。

一日モ休ンダコトハアリマセン。
鎌ヲキタヘテキタコトモアリマス。
鍬ヲ打ッテキタコトモアリマス。
ナタヲ打ッテキタコトモアリマスシ、車ノ輪ヲ打ッテキタコトモアリマス。

4　息子の箇所が現在法を用ひてゐるのは言ふまてもなく現在の人の說明てあるからてある。

指導計畫

1　かういふ文章は、老鍛冶のことが書いてあることを把握させ、この文は

カヂ屋
- 老人
  - 正直デ氣ダテヤサシイ
  - ヨク働ク人
  - 去年ノクレニ死ンダ
- ムスコ
  - 去年マデ奉公ニ行ッテキタ
  - ヨク働ク人

といふやうに、その要點を摑ませ、その內容を本文によつて證明させるやうに指導すれば面白い研究が出來る。

2　本文の主眼點は鍛冶屋の忠實な働き振りにあるのだから、此の點を文章上よりよく讀み味はせるやう指導しなければならぬ。

3　研究欄に示しておいたやうに、助詞「が」の用法（イタッテ正直デ氣ダテノヤサシイ老人デシタが主要てあること）、列擧の仕方、側寫的の說明（夏の暑い日の働き振りから他を想像させる）、文の照應（日ノクレルマデ働イテキマシタが毎朝暗イウチカラに照應してゐる）等についても指導が必要てある。

4　作者については、別に取り立てゝ想定する必要はないが、老鍛冶を研究すると共に、自然に明かになつて來るやう取扱ふのが理想てある。因に作者と老

鍛冶との交渉のある所は

私ノ近所ニ年ヨリノカヂ屋ガアリマシタ。

私ハ時々其ノ仕事場ヘ行ッテ見マシタ。

何時カ私ノウチノッルペノ金タガガコハレタ時、ックロヒヲタノンダラ翌日スグニナホシテクレマシタ。

かくて作者の鍛冶屋に對する心持をも考へさせるやうにすれば面白いと思ふ。

5　語句にはスルドクテ・イタッテ・氣立・弟子・仕事場・キタヘテ・ックロヒ・翌日・奉公等、兒童には耳なれないものも少くないから、語句の内容意義をよく理解させる必要がある。

6　文字としては讀み方では直・弟子、書き方では休（体）・働（動）・鍬・輪等につき特に指導しなければならぬ。

時間　約三時間

準備

鍬、鎌、なた等の繪畫又は實物。

參考

文字の讀方

氣立。正直。弟子。仕事場。何時カ。金タガ。其ノ後ヲッイデ。

語句の意義

【目ガスルドイ】きらりとした目付、恐ろしげな目付。

【氣立ノヤサシイ】氣まへのやさしい、心のやさしい。

【キタヘル】鐵を火に燒いては打ち、水に入れては燒きして益々堅くすること。

【鍬ヲ打ッ】「打ッ」はこゝにては鍛へること。

【金タガ】金屬製の輪（タガ）。

【ックロヒ】（繕）修繕、なほし。

【奉公】他人の家へ雇れて何年かつゞいて務めること。

【翌日】あくる日。

【弟子】をしへを受ける人。門人。

【仕事場】仕事をする所。

【イタッテ】しごく。きはめて。もつとも。

第十六　航海の話

主眼

船長の講話の要所――海國民として海を恐れず之に馴れておくことを、その愉快なる航海の話によつて感じさせたいと思ふ。後半の暴風雨時に於ける航海はその恐しいことを主としてはならない。さういふ危險時においても、それぞれ避難の道のあること、即ち航海上の知識を把捉させるやうに指導しなければならぬ。

研究

1　遠洋航海を終へて、鄕里に歸つた船長が母校へまねかれて航海の話をした。その講話を主とした文章である。

2　講話の結構は

話の前置と太平丸の說明

出帆して外國の港に着くまでの愉快さ

航海中の危險と航海上の知識

海國民として海事思想の必要なこと

となつてゐるが、講話の趣旨は最後の段落にあることはいふまでもない。文の形式から言へば「船長はかくいひて後、一だん聲をはり上げて、」と說明句をあげて、文の中心點を指示してゐる。

3　文の中心點は最後の船長の話にあるが、航海の話として感興を感ずるは、航海中の話である。

4　航海中の話は修辭法等を用ひて巧に具體的に美化してあるが、何處までも說明的態度であることは注意を要する。即ち特殊の航海ではなく、航海の樣子を概說したのである。文章は次のやうに

人家はだん〳〵小さくなつて行きます。

どちらを向いても青い水ばかりです。

等の如く現在法を用ひてある。これは說明的態度の一特質である。

5　今航海中の愉快な事物の主なるものをあげると次のやうになる。

港の人家――だん〳〵小さくなつて行きます

海岸の松原――次第に遠くなつて、しまひにはもう何も見えなくなります

いその小山

青い水――どちらを向いても青い水ばかりです

日の出

日の入――日光が波にうつつて、水の色が金色になります

月夜――波が銀色に光ります

鯨――高く潮を吹いてゐるのを見ることがあります

いるか――何萬とも知れないいるかが、はね上つてはおよぎ、はね上つてはおよぎして行くのを見ることがあります

とび魚――ある時にはとび魚が甲板の上へとび上ることもあります

外國の港――家――見なれない形の家が立並んである

人――ちがつた風をして、ちがつた言葉で話する

更に航海中の危險なこと及びその避難法をあげると次のやうになる

山のやうな波が立つて、
暴風雨船は今にも沈むかと思ふやうになります　けれども船はなか〳〵沈むものではない

きり
大雪　一寸先も見えなくなる—危險をさけるため
外の船に衝突する—かねや汽笛をならす
らしんぎ——方角を示す
星——方角を知り自分の船の位置がわかる
燈臺——海岸の所々にあつて、何所だかわかる

指導計畫

1　十頁に亘る長篇であるから、兒童は文の要所を掴むことが困難であると思ふ。故に最初からその要所を掴ませようとせず、兒童の最も興味を感ずる點から研究させて行くがよい。

2　兒童の興味は恐らく航海中の愉快な所であらう。そこで先づ其の點を十分明かにさせるがよい。さうすると、兒童は航海の面白味を感じて、航海がして見たい、海に活動して見たいといふやうな心持を起すに至るであらう。かくすれば却つて本課の目的に副ふことにもなる。

3　かくて、航海は常に以上の如く愉快なことばかりかと切込めば、容易に恐しい航海の部分を讀ませることが出來る。

4　航海の危險は前述のやうにそれに主をおいてはいけない。之を逃れるにはどうするかとその避難法に重をおいて、自然に航海上の知識を獲得させるやうにすれば上乘である。

5　かく展開させて、一体これは誰の話か、何のためにこんな話をしたのかと誘導すれば、船長の講話の趣旨も領解させることはさほど困難なことでなからう。かくて講話の結構に觸れさせて行くがよからう。

6　本課のやうな長篇については、教材の區分が常に問題になるが、以上のやうにして取扱へば自然に全體的學習の指導が出來る。

7　航海中のいろんな景色又は事物は繪畫に表現させると一そう具體的になる。繪畫表現の指導には摸式的の教材である。

8　羅針儀及び星、燈臺等により方角を知り船の位置等を知ることは、此の學年の兒童には少し困難であるが、兒童の理解する範圍の說明が必要である。因に星については卷九に「星の話」が出てゐる。

9　尙本課に關係ある課は卷七「世界の話」卷十「燈臺守の娘」「捕鯨船」卷十一「我は海の子」卷十二「港入」等である。

10　本課の內容は兒童の生活にないものであるから、用語にも亦耳新しいものが多い。遠洋航海乘組人員・いかりをあげて・鯨が高く潮を吹く・いるか・とび魚甲板・一寸先・淺瀨・らしんぎ・燈臺・海國漁業・航海業・拍手・寄泊等なか〳〵多いが、表面的の解釋に止めず、その內容を明かにするやう努めねばならぬ。

11　長篇であるから新出讀替兩文字ともかなり多く提出せられてゐる。

新出―航・終・鄕・講・堂・存・員・鯨・甲・恐・瀨・笛・角・燈・臺・漁・寫・帖。

讀替―通・並・岸・光・板・總・等・何所・殘・他・眞・去。

12　讀み方で注意を要するは、太平丸・甲板・自分等・何所等であり、書き方では新出漢字には多畫の文字が多いから分解的の取扱、終は糸扁に冬、講は言扁に冓の如くして記憶させるやうにするがよい。

時間　約六時間

準備

挿繪の擴大着色圖。海の雄大なる景色をあらはした寫眞又は繪畫。海上の日の出、日の入、月夜の美觀を描いたもの。外國の寄港地の珍しい景色の寫眞又は繪畫。大汽船の內部の設備などを示した寫眞。羅針儀の模型又は繪畫。

參考

文字の讀方

遠洋航海を終へて。太平丸。一日。乘組人員。いその小山。金色。銀色。甲板。居場所。所々に。何所。渡船。

語句の意義

【航海】船で海洋を渡ること。

【一日】或日。

【乘組人員】船中で諸任務に從事してゐる人を乘組員といふ、その乘組員の人數のこと。

【いかり】（錨）碇泊の時之を海底に下して泊る、出帆の時之を船の上に引き上げる。
【いそ】（磯）濱邊、海岸。
【淺瀨】川や海の淺いところ。
【衝突】ぶつつかる、つきあたる。
【らしんぎ】（羅針儀）磁針裝置によつて方角を知る器械。
【海國】四面海を以てかこまれた島國で海に關係の多い國をいふ。
【渡船】川に橋がない時船にて人を渡してゐるもの。
【漁業】魚類を捕へる業。
【航海業】貨物や乘客の運搬を業とするもの。
【むすぶ】こゝでは話の終りをつける。
【拍手の音】手を拍つ音。

第十七　安倍川の義夫

主眼

貧しい生活をしてゐても、その心は實に公明正大にして氣高かつた安倍川渡場人夫の人格に對して、兒童の心に深い感動を與へたい。又紀州の男の義理堅い點もよく味讀させたい。

研究

1　十四頁に互る長篇であるが、話の梗概は、安倍川の人夫が川邊で大金のはいつた財布を拾ひ、これは先程渡賃をねぎつて相談が出來なくて、一人で渡つて行つたあの男の物に違ひないと思ひ、直ぐさまその男を追へかけ、三四里行つて、その男にあひ財布を返した。その男は非常に喜んで、その金の半分をお禮にさし上げようといふ。人夫は之を受けないで歸りかける。男は人夫の後について其の家に到り禮金を出さうとしたが、どうしても受けて呉れないの

て、終に訴へ出た。役人は感心して二人の心がけをほめ、人夫へほうびの金をたくさん與へたといふ話である。

2　人夫の義心が本課の中心點であるが、文章上に現れてゐる點をあげると

イ　これはあの人が落して行つたにちがひないが、渡賃が高いといつて、此のあぶない川を一人でこしたほどの人である。もし此の大金がなかつたら、氣がちがつて死ぬやうな事になるかも知れぬ。氣の毒なことだと思つて人夫はすぐ川を渡つて、かの男を追つかけました。

先づこゝに人夫の美しい誠心が強く動いてゐる。

ロ　次には川を渡り三四里も男の跡を追うて財布を返した所亦常人の出來ることとてない。

ハ　男は夢かとばかり喜んで、有難涙に暮れて、財布の中のお金を半分だけお禮の印にさし上げると言ふと

「おやめなさい。あなたから一文でももらふ氣があるくらゐなら、此所まで持つて來はしません。さあ、道を急ぎなさい。私は渡場へ歸つて人を渡します。」

と言つて濟してゐる。清淨潔白な彼の心中が察せられる。

ニ　男は人夫を引止めて、金の事情を語りて禮金を受取つてくれと懇願し名前を承りたいと言つたのに對して

「もしお金をもらつたら、あなたの氣はそれですむかも知れませんが、私の氣がすみません。私は川ばたの人夫で、名前をいふ程の者ではありません。家には七十近い父と、三十になる妻と、三つになる子どもがあるので、どうかすると、其の日のくらしにこまるやうなこともありますが、心にすまないことはまだ一度もした事はありません。たとひ親子の者がうゑ死をするやうなことがあつても、人からいはれなく金をもらはうとは思ひません。」

ときつぱり彼の心を打明けてゐる。彼の高潔な人格が光つてゐる。

ホ　男が人夫の後を追うて彼の家に行き、わらぢを作つてゐる父や、ぼろを綴つてゐる妻に對して禮金を受けてくれと願つても受入れない。そこに人夫の家人も亦人夫と同じ樣な潔白な心の持主であることが分る。義理を忘れて功利に走る現代では夢想も出來ない人々である。

人夫が主人公であるが、紀州の男も亦義理堅い人であつた。今文章に現れ

た主なる點をあげると次のやうてある。

イ　大金てあるのに、その半分をお禮に差上げようといつた所

ロ　歸らうとする人夫を引止めて、金の事情を明かにして禮金の受入れを願ひ、名前をきいて妻子に朝晩念佛の代りに唱へさせると言つた所

ハ　人夫がどうしても禮金を受けないので、態々四里の道を戻り、川を渡つて人夫の家に行き、人夫の父や妻までに懇願した所

ニ　終に思案に暮れて役所へ訴へ出て、人夫の義心に酬いようとした所

4　役人が二人を呼び出して

「さて〳〵、二人ともまことに心がけのよい者。近頃かんしん致した云々」

と激賞したのは、以上に列擧した二人の心がけを言つたのはいふまてもない。

5　本文全體叙述體の文章てあるが、次の一節は忽ち描寫體になつて、文章は頓に緊張味を帶びて事件を活寫してゐる。修辭法の活用實に妙を極めた所てある。

三四里行つて、大きな峠へかゝりますと、上から片はだぬいて、右手につゑをついて、かけ下りて來る者があります。（現在法）見れば先の男てございます。人夫は「もし〳〵。」と呼びかけて、たづねました。

「あなたは今朝一人て川をこした方てはありませんか。」

「さうてす。」

「なんて又さうあわてて引つかへします。」

「落し物をしましたから。」（省略法）

といひ〳〵かけ出します。（現在法）人夫は其の男のたもとをおさへて、

「まあ、（咏嘆法）お待ちなさい。落した物は。」（省略法）

「革の財布て。」（省略法）

「中には。」（省略法）

「小判が百五十兩はいつて居ります。五十兩は黃色なきれにつゝんてあつて、百兩は小さなふくろに入れてあります。外にまだ手紙が七八本。」

（省略法）

「安心しなさい。此所へ持つて來ました。」（倒置法）

6　尙本文の初めから六十三頁の八行目までは安倍川の川止及川渡の說明のために書かれたものて、これを純描寫的に書いたらばと思ふが、教科書の性質

として說明的になつて文勢を殺いてゐる。

指導計畫

1　かういふ長篇の文章になると、いつも區分法が問題になる。區分法には豫め第一時には何頁の何行目まで第二時には何處までといふやうに區切る分節と、別に何處までといふやうに區切らずに全體的に取扱ふものとがある。幸本課は練習敎材で新出文字の提出もないから、私は全體的に學習させた方がよいと思ふ。しかし、分節して取扱つてはならぬといふのでない。若し分節するなら、此の文の文段の切方から言へば大分節がよい。

第一分節　自始、至六十五頁八行

第二分節　自六十五頁九行、至七十頁八行

第三分節　自七十頁九行、至終

そして常に各部分の關係を緊密に圖つて行くことを忘れてはならない。

2　分節的に取扱ふ場合は事件を文章の叙述順に展開させることが容易だから、人夫及び紀州の男の美點を漸層的に取扱つて兒童の感銘を強くすることを忘れてはならない。漸層的取扱とは低きより高きに、淺きより深きに及ぶがやうに取扱ふのである。かくの如く二人の美點を次第に高き又は深き所に導いて行けば、兒童の感動は愈々強くなるものである。

3　全體的取扱によれば、先づ兒童の感動した點から擧げさせて全文章を讀ませるやうに誘導する。此の際敎師はこれ等の美點をなるべく漸層的に排列して、事件の自然的發展を圖り感動を强めるやう工夫しなければならぬ。

4　本課の內容については、先づ時代を明かにしておかなければならぬ。起首の百八九十年をよく生かして、安倍川に橋のなかつたこと、人夫の助によつて川を渡つたこと、卽ち交通の不便であつたこと。小判が當時の通用貨幣であつたこと等の理解を與へておかなければならぬ。

5　人夫の一貫した義心、それから紀州の男の物堅い心をその言動からよく讀み破らせて、役人が二人の心掛に感じた點を味讀させることが要點である。

6　研究欄に示した、文章の妙所は表現の洗錬された點を味讀させて、その時の光景を想像させるやうにすれば、兒童の感動は一そう深刻化して行く。

7　新出文字はないが、語句には義夫・連日・あふれ・川べの宿（しゅく）・人ごみ・人夫・見すぼら

しい・やうやう・ゆめかとばかり喜んで・ひつきりなしに・まして・たとひ・かくご・紀州・房州・出かせぎ・だんな・氣がすむ・うけたまはり・うゑ死・いはれなく・ぜひ・ろばたせつかく・しあんにくれて・心がけ・手あて等があるから、讀解の支障をなくするやう努めるがよい。

時間　約五時間

準備

安倍川を說明すべき地圖。

參考

文字の讀方

渡賃（ワタシチン）。大金（タイキン）。今朝（ケサ）。幾度（イクド）か。渡場（ワタシバ）。此（コ）の中（ナカ）の金（カネ）を。一文（イチモン）。七十近（デカ）い。此方（コナタ）。

語句の意義

【義夫】義行のあつた人夫、義とは仁義の義で自巳の利害をかへりみないで人の爲めにつくすといふ、卽ち普通にいふ義理の意。

【連日の雨】毎日々々ふりつづく雨。

【川といふ川】あらゆる川、どの川も皆。

【水があふれる】水が一ぱいになつて流れ出る。

【見すぼらしい】貧相な、貧乏臭い、見ともない。

【たもとをおさへて】たもとをつかまへて。

【紀州】紀伊の國。

【房州】安房の國。

【出稼】故郷をはなれて、遠く他國へ働きにゆくこと。

【れふ】（漁）漁業。

【だんな】主人。

【おねんぶつ】（お念佛）南無阿彌陀佛と稱名すること。

【いはれなく】わけもなく、ゆゑなく。

【せつかくてすが】せつかくのお志ですが、そればかりはいたゞけません、せつかくはわざ〳〵。

【しあんにくれて】どうしたらよいかよい考へがうかんで來ないので考へにつまつて。

【さて〳〵】然あるかと心に承くるにいふ聲、さうか〳〵。

【手あてをいたす】勞に對して慰めるために與へる。

【男はしあんにくれて……以下終り迄】「金をとつてもらへぬ」とのつたへは實に妙な訴へてある。古今未曾有の珍訴訟であらう。そのさばきも實に當を得たさばきてある。讀者をしてどうするだらうと不安をいだかせたこの成り行きに最後の解決を與へて、讀者をして、胸をなで下さしめることろてある。

第十八　木下藤吉郎

主眼

一草履取としての木下藤吉郎がその主織田信長の下にその職務に精勵し、終に見出されて、信長の信任を得るの基となつた話を讀ませて、藤吉郎の心掛の尋常でなかつたことを感じ悟らせたいと思ふ。

研究

1　誠に氣持のよい文章てある。秀吉出世の端緒となつただけ兒童にも喜ばる教材てある。

2　本文の要所は信長が藤吉郎の奉公に感じた點にあると思ふ。今文章から之を吟味すると次のやうてある。

イ　信長はよく夜明前から馬場へ出て馬を乘りならした。毎朝げんくわん へ出て、

「誰か居るか。」

と呼ぶと、いつも藤吉郎が眞先に出て來た。

毎朝玄關に出ると、藤吉郎が常に眞先に出た。既に奉公に忠實であることがわかる。

ロ　或大雪の朝、信長はいつもより早く起きて、

「誰か居るか。」

と呼ぶと、やはり藤吉郎が出て來た。

信長は、大雪の朝而かも平生より早く起き出たのである。それだに「誰か居るか」と呼ぶと、いつものやうにやはり藤吉郎が出て來た。如何に彼が主に奉公に勵んでゐるかがわかる。

ハ　「そち一人か。」

「はい。」

「いつもより早いのに、よく參つて居つた。」

「いつも人より一時前に參つて居ります。」

「一時も前に。」

といつて信長は驚いた。

微賤の身ながら、人より一時も前から參つて主人を待つてゐる、彼の誠意が感ぜられる點である。

ニ　「寒からうが。」

「少しも寒くはございません。」

「寒くはない。」

「はい。これが御奉公だと思ひますれば、少しも寒くはございません。」

一時前から來てゐると聞いては信長もそぞろに同情の念は湧いたのであらう。「寒からうが」この言葉を受けて藤吉郎は「少しも寒くはございません。」と凛然と言ひ切つてゐる。その言葉に疑心を起した信長が「寒くはない？」と反問すると、「御奉公だと思へば少しも寒くはございません。」と答へてゐる。御奉公だ、御奉公だから寒くはないと言つてゐる所に彼の愈々奉公大事と思ふ誠意が現れてゐる。信長がうなづいたのは藤吉郎の此の誠意を認めたのであらう。

3　文末の「そも〳〵藤吉郎出世のいとぐちである。」は起首の「豐臣秀吉」に照

應する所で、藤吉郎が出世して豐臣秀吉にまで昇進する意味を暗示してゐる。

指導計畫

1　起首の「豐臣秀吉がまだ木下藤吉郎といつて、織田信長の草履取をしてゐた時のことである。」の文は、結尾の「藤吉郎出世のいとぐち」と照應して、

木下藤吉郎……織田信長の草履取
　　（出世）
豐臣秀吉……？

のやうに導いて、秀吉の身分地位に學習動機を起させて、これを解決するやう指導すれば面白い。第二十三「加藤清正」を參照させれば最も面白いと思ふ。

2　研究欄に示した信長が毎朝玄關へ出ると、いつも藤吉郎が眞先に出て來た所は之を具體化して、或大雪の朝の出勤の豫備とすることを忘れてはならぬ。

3　大雪の朝信長が藤吉郎の勤めに感じた點は研究欄に示したやうに三箇所あるから、これを毎朝の勤と關係づけて、彼の忠勤の心がけを想察させるやうに導いて、信長のうなづいた理由を明かにする。

4　此の時の情景をまのあたりに想像させるには之を脚本にすれば面白い。一幕は或大雪の朝の場面、一幕は役人に召使はれる場面とすればよい。脚本はすこし指導すれば兒童でも容易に創作することが出來る。

5　朗讀法としては地の文と對話の部とを區別して讀ませるやう指導するがよい。

6　語句にはむづかしいものはないが「一時（ヒトドキ）」は時代語だから、本文にも說明はしてあるが、讀み方と共に注意する必要がある。

7　新出漢字は、藤・信・驚（トウ・シン・オドロク）の三字であるが、藤・驚共に點畫の困難な文字であるから注意を要する。尙「誰」はよく「唯」と誤記するから、扁に特別の指導が必要である。

時間　約二時間

準備　信長及秀吉の肖像。日本地圖。

參考　第十八　木下藤吉郎（卷七）

文字の讀方

夜明前。馬場。毎朝。誰か居るか。一時。其の後。

語句の意義

【馬場】乘馬練習に用ひる場所。

【馬を乘りならした】乘馬の練習をした。

【そち】（其方）汝、お前等と下の者に對することば。

【寒くはない】疑問の言ひ方で「寒くはないか」の意味。讀むときに語尾を上げねばならぬ。

【御奉公】こゝでは主人に仕へる意。

【うなづく】合點する、頭を前へ動かすこと。

【役人の數に入れる】役人でないものを役人とした。

【そも〳〵】一體。

【いとぐち】はじまり。

第十九　海ノ生物

主眼

本學年程度の兒童になれば、見たり味つたりして海の動植物についてはその名前位は餘程知つてゐる筈であるから、兒童が本文を讀んでそれ等の繰りのない知識を整頓すると共に、海の動植物の樣々な面白い形態や生態について新しい知識を得、そこに動植物研究の面白みを感ずるやうに導くのが本篇の趣意であらう。

研究

1　表示して見よう。

(1) 海ニハイロ〳〵ノ動物ガスンデ居リ、樣々ノ植物モ生エテ居ル。

（魚類）水ノ表面ニ近イ所ヲ泳グモノ―イワシ・アヂ・カツヲ等
（岩ノカゲヤ海藻ノ間ヲ泳グモノ―タヒ・アナゴ・ハモ等

(2) 海ノ動物

- 底ニ沈ンデキルモノ―カレヒ・ヒラメ等
- エビ・カニ・タコ・イカ等ノ類
  - エビヤカニノ樣子ハ池ヤ川ノトカハラナイ
  - タコヤイカガ泳ダ樣ハ面白イ
- 貝ノ類
  - 砂ヤ泥ノ中ニ居ルモノ―アサリ・蛤
  - 岩ニツイテキルモノ―
    - アハビ・岩ヲハナレテ動クコトガアル
    - カキ
      - 一度ツイタラ決シテハナレナイ
      - スグフエル
      - 軍艦ヤ汽船ニツクトコマル
  - 真珠貝―
    - 指輪ヤ襟留ナドニハメル真珠ハコノ貝ノカラノ中ニアル
- 虫類
  - サンゴ
    - タクサン集ッテ、木ノ枝ノヤウナ形ヲシテキル
    - カンザシヤネガケノ玉ニスルサンゴハ此ノ蟲ノ骨
  - 海綿
    - 海ノ底ノ岩ニ取リツイテキル
    - 物ヲ洗ッタリ、ブイタリスル時ニ使フ海綿ハ此ノ蟲ノ骨

- 陸ノ獸ニ似タモノ―ラッコ・ラットセイ・アザラシ等
- 獸類
  - 魚ニ似タモノ―
    - イルカ
    - 鯨―體ガ甚ダ大キイ
      - 陸デ一番ノ象（赤子）
      - 鯨（大人以上）

(3) 何萬尺モアル海ノ深イ所ニハ

- 動物ハゴクマレ
- 植物ハ全ク無イ

(4) 海ノ植物

- 岸ニ近イ淺イ所カラ二三百尺グラキノ所マデニ生エテキル
- 使ヒ途
  - タベルモノ―
    - コンブワカメ・アラメ・ヒジキ・アマノリ・アヲノリ・モヅク等
  - 糊ニスルモノ―スノリ・ツノマタ
  - トコロテンヤカンテンニスルモノ―テングサ・エゴノリ
  - 肥料ニスルモノ
- 形
  - 帶ノヤウニ廣クテ長イモノ
  - 全體ガ細カニ分レテ、枝ノヤウニナッテキルモノ
  - ニハトリノトサカニ似タモノ

（海藻）
- 色
  - 綠色ノモノ―ミル・モヅク……淺イ所ニ生エテキル
  - 茶色ノモノ―コンブアラメ……中間ニ生エテキル
  - 紅色ノモノ―テングサ……深イ所ニ生エテキル
  - 一ガイニハ言ヘヌ
- 陸上ノ植物ト違フ所
  - 花ガ咲カナイ
  - 根ノヤウナ所―岩ヤ石ニクッツクダケノ用ヲナス
  - 體ノ全面カラ養分ヲ吸ヒ取ル

2　「動物」の起首「海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤ其ノ外イロ〳〵ノ動物ガスンデ居リ、又サマザマノ植物モ生エテ居ル」は本課全體の起首と見てよい。

3　「動物」「植物」共に頭括的記述を採り、各文段も亦さうてある。從つて文理整頓として、合文の形が多い。

指導計畫

1　かういふ課は動物植物別々に分節的に學習させて、之を生物として纏めたらよい。

2　此の課の眼目とする所は海の生物を幼稚ながら分類してその形態及び生態を系統づけて、これ等に關する知識を整頓しようとするのてあるから、此の目的に副ふやう學習させなくてはならぬ。

3　それには讀解を研究欄に示したやうな表解に導き實物標本挿繪等を利用して理解ある知識を整頓させるやうにすればよい。

4　分類的に書いた文章の摸式てあるから、分類が知識整頓の上に價値あることも表解によつて指導する必要がある。

5　文段の意味を把らせるにも適切な材料てあるから、文段研究によつて、概括の仕方を指導し讀解力を養成して行かねばならぬ。

6　一篇の總括としては、廣漠たる海中にはこれ等の生物が無數に存在せることを思はせ、その生態の樣子を想像させると共に、海の富源をなすことを考へさせたいと思ふ。

7　理科的の說明てあるが、所々に修辭的の句法を用ひてゐる。

イロ〳〵ノ動物ガスンデ居リ、又サマザマノ植物モ生エテ居ル（對比法）

エビノヒゲハネタリ（擬態法）

面白イノハサンゴデ、タクサン集ッテ、木ノ枝ノヤウナ形ヲシテキル（直喩）

法）

象ヲ鯨ニクラベルト、赤子ト大人トヨリモ、モットチガフ（比較法）

帶ノ樣ニ廣クテ（直喩法）

枝ノ樣ニナツテキルノモアリ（直喩法）

ニハトリノトサカニ似タノモモアル（直喩法）

海藻ニハイロ〳〵アル

海藻ノ形ハ樣々デ

色モ一樣デハナイ　句法の變化

これ等は理解を明瞭にすると共に、說明の單調を避けてゐるのであるから、その點を吟味させることが大事である。

8　語句は表面・種類・肥料・中間・養分等の外は殆ど支障になるものはないから、文字の讀み方を指導して、文章吟味に力を注ぐべきである。

9　文字としては泳・藻・泥・決・珠・集・骨・甚・肥・料（科）・絲（緣）・咲（知）・吸等比較的誤り易いものが多いから、書取練習を重んじなければならぬ。「体」は「體」の通用文字として提出せられてゐるから、これまた練習を要する。

時間　約五時間

準備

海の生物の實物標本又は着色せる繪畫。

動植物の海中棲息の有樣をかいた繪畫。

參考

文字の讀方

魚類。一度。時々。根ガケ。赤子。大人。一樣。綠色。紅色。

語句の意義

【根ガケ】婦人のもとどりにかける裝飾品。

【肥料】農作物のこやし。

【一ガイニイフコトハ出來ヌガ】皆さうとは言はれぬが。

【中間】間の所。

第二十　マリーのきてん

主眼

マリーの氣轉があやふき自國の兵士を救つた美談である。之を讀ませて、その危機一髪の場合に一少女の身を以て、よく氣轉をきかせた機智に感嘆させたいと思ふ。

研究

一　マリーになつてこの場面をかいて見よう。

あわただしくかけこんで來た者があります。見れば自國の兵士です。

「かくして下さい。敵が追つかけて來ます。」

とせきたてます。

私はどこかよいところがないかと、あたりを見まはしましたが貧しい木こり小屋で、戸棚一つありませんからどこにもかくすところが見つかりません。

どうしたらよからうと氣をもんでゐますと、

「ては水を一ぱい下さい。」

と兵士が言ひました。私は大急ぎでコップに水を汲んで來ました。あまり急ぎましたので、兵士に渡さうとするときその水がいすの上にあつたおばあさんのづきんの上にこぼれました。

「あつ」と思つてそれを見たとたんに、

「あゝ、さうだ。」

と思はず小聲でさけびました。そしてすぐさまそのづきんをとつて兵士の頭にかぶせました。そうして、

「しばらく、うちのおばあさんにおなりなさい。」

かういつておいて、又大急ぎで、おばあさんの着物をとつて來て着せてあげました。それから肩かけや、前だれまでしてあげました。

「向ふむきになつて、此のいすにかけていらつしやい。」

「かうですか。」

「あゝ、さうです。それからつんぼのまねをしてね。」

さういひ終るか終らぬうちに、どや〳〵と四五人の敵兵がはいつて來ました。かくごはしてゐたものゝ、思はずびつくりしました。

「おい娘、兵士が一人來たらう。」

「いゝえ。」

「たしかに來たはずだ。」

といつて、敵はあちこち見まはしましたがかくれてゐさうにもないので、そこに腰かけてゐる兵士の肩に手をかけて、

「これおばあさん、お前は知つてゐるだらう。」

この時私はひやつとしました。聞えぬふりをしてゐてくれゝばよいが。若しだまつてゐたら前へ廻つて見はすまいか。或は又むりに引つ立てはすまいか。どうぞ氣がつかなければよいがと氣が氣でありませんでした。

ところが兵士のおばあさんが、

「はい、よいお天氣でございます。」

敵はどつと笑ひました。

その時私はほつとしました。

「こいつ、かなつんぼだな。」

と言つてみんな出て行つてしまひました。その後で私は「あゝ、こわかつた。」と、思はず口に出しました。兵士は、

「あなたのきてんで私の一命を助けてもらひました。」

と喜びました。

「あなたのつんぼも上出來でした。」

「しかしよく聲色に氣がつかなかつたものです。これは敵が急いでゐたからでもありませうが、全く天の助けです。」

かういつて兵士と私はその時の恐ろしさを思ひ出して喜び合ひました。

2　書き起しが非常によい。突然の出來事を叙するに突如と筆を起したところ、八波先生のポット出主義の文章である。若しも「或る山中の小さな木こり小屋におばあさんと、少女のマリーがすんでゐました或日のこと……」等と書き起したならばすつかり氣分が合致しない。

3　「あゝ、さうだ。」といつてマリーはおばあさんのづきんを取つて、兵士の頭にかぶせました。「しばらく、うちのおばあさんにおなりなさい。」かう言つて、又

大急ぎでおばあさんの着物を着せてやりました。肩かけや前だれまで。「向ふむきになつて、此のいすにかけていらつしやい。」「かうですか。」「あゝさうです。それから、つんぼのまねをしてね。」

この書きぶりもよい。自然だ。「あゝさうだ。」といつたことはかいてあるがどんな名案を出したかは言つてゐない。その後のマリーの行動によつて次々とその方策が現はれてくるのである。かういふ描法によると、讀者は讀みながら、各自自由な想像を廻らしていくからそこに讀者の興味が湧いてくるのである。若し「マリーは此の兵士をお婆さんに化けさせて、つんぼにしておかうと思つて、おばあさんのづきんを取つて、兵士の頭にかぶせました。それから、着物や肩かけや云々……」等と書いたならば讀者の興味は全く起つてこない。

4　文全體が非常に輕妙な筆つきでこの想をあらはすにふさはしい。すると兵士のおばあさんが、「はい、よいお天氣でございます。」等は殊に面白い。

指導計畫

1　練習文であるし、語句にもむづかしいものはないから、文章を中心として、此の場面を想像させ、その機智を考へさせて行きたい。

2　此の場面を想像させるには、研究欄に示したやうに、兒童をマリーにならせて、事件を發展させて行けばよい。そして刻々におけるマリーの心持を十分想像させて行く。これを文章に創作させたら一そう面白いと思ふ。

3　更に之を具體化するには劇化するがよい。劇化の敎材として、兒童向のものとして適材である。そんなに練習や準備なくして容易に實演せられるものである。

4　機智を考へさせるには、先づ「マリーはどうかしてかくしてやりたいと思ひました。」と兵士を思ふ美しい心を把えさせなくてはならぬ。このどうかしてかくしてやりたい！　此の重大問題に少女の頭は一ぱいになつてゐたのである。されば、こそ、椅子の上に水がこぼれておばあさんの頭巾を濡すと忽ち妙案は思ひ浮んだのである。「あゝ、さうだ」此の時のマリーの計畫を兒童に考へさせることが大事である。かくて兵士をおばあさんにしたが、少女は更に考へついた。「それから、つんぼのまねをしてね。」かく彼女の機智は活

躍した。この三點を連關して考へさせなくてはならぬ。

時間 約二時間

準備

歐洲地圖（戰爭說明圖ならば更に可）

參考

文字の讀方

木こり小屋。兵士の頭。

語句の意義

【あわただしく】あわてたやうにばたばたと。

【木こり小屋】木こり（樵夫）の小さい住みか。

【あゝさうだ】ふとよい考へを思ひついた時に思はず發する聲。

【かなつんぼ】つんぼのひどいもの。

【どや〳〵】大勢が一度に入つて來る有樣を云ふ副詞。

挿繪

獨逸兵が追つかけて來て、兵士のおばあさんの肩を叩いて「これ、おばあさん、お前は知つてゐるだらう。」と問うてゐるところである。マリーは向ふに心配さうに立つてゐる。金髪を肩に垂れて頭に簡單な帽子を戴いて少女洋服をきて靴下を穿き靴を穿いてゐる。右手を後に廻し左手を頸にあて如何にも氣遣はしさうの樣子である。獨逸兵の先きののは將校らしく、頂きに尖りのある兜のやうな獨逸將校獨特の帽子を冠り、髭を生やして劍をつつてゐる。後ののは兵卒らしい。帽も裝飾のないもので銃を持つてゐる。いかにも急いで駈け込んで來たらしい體である。ばあさんの腰掛けてゐる椅子は甚だお粗末なものである。室内も何の裝飾もなく、調度もなく「木こり小屋」と云ふ風である。

第二十一　二百十日

主眼

農家の子供が或る年の二百十日の有樣を寫した文てある。この文を透して、その二百十日の日の有樣なり、作者の家の生活なりを想像させることによつて、創作的態度を養ひ、且二百十日について一般の知識を獲得させたいと思ふ。

研究

1　「よいあんばいだ。此のもやうなら、今日は大したことはあるまい。」

これまたポット出主義の文章て、突如として父の言葉から書き起してゐる。

2　「朝飯がすむと間もなく、稻の葉がさわ〳〵し出した。」

こゝに先づ二百十日の氣分がする。父が「やはり二百十日だ。風が出て來た。」と裏書をしてゐる。

3　「おぢいさんにきいたら云々」の一節は教科書なるが故にかういふ説明が

は入つてゐるのだ。なくてもよいと思ふ。

4　「どうかひどい風にならなければよいが」

と、おぢいさんが言つていらつしやつたが、其の中に南の空が黄色になつて、風がだん〳〵はげしくなつて來た。垣根も倒れれば、しをり戸も外れる。まして稻田は大波が打つ。

「困つた風だ。」

とおつしやつて、おぢいさんはかぼちや棚につつかい棒を入れたり、菊の鉢を軒下に運んだりされた。

こゝまてが、此の日の中心點て、二百十日の氣分の現れてゐる所てある。圖點を打つた現在法て書いてゐる所が頂點てある。

5　午後は大風一過、無事に此の厄日を送つた所てある。

6　此の文を透うして見ると、作者の家は農家てあることは一讀して明瞭てある。厄日は農家の最も心配する日てあるから、此の作者も農家の子供としたのてある。

7　父やおぢいさんの心配は、その言葉によく現れてゐる。

「よいあんばいだ。此のもやうなら今日は大したことはあるまい。」

先づ安心の體てあるが

「やはり二百十日だ。風が出て來た。」

聊か憂慮の色が面に浮ぶ。

「どうかひどい風にならなければよいが。」

おぢいさんが先づ心配し出す。

「困つた風だ。」

困惑の色があり〳〵と見える。

指導計畫

1　二百十日とはどんな日てあるか、本文の讀解によつて之を解決させる樣に指導するのがその上乘なものてあらう。

2　二百十日に關する知識は作者がよく說明してゐるから、兒童は之を讀んて大風の吹く厄日てあることは解決するてあらうが、暴風がどうして起るか等の質問が出たら適當に之を說明してやる必要がある。

3　二百十日の厄日を描出するのに、父と祖父の言葉を巧に取り入れて、その情景に心持を現はした描寫の態度をよく味讀させたいと思ふ。それには父と祖父の言葉を此の文から取り除いて比較させたら、此の言葉を取り入れた手際がわかるだらう。

4　冒頭を取扱ふには、お父さんの言葉から書いてあるから面白く出來てゐる等と一般的に說明してはならぬ。かくすると、言葉から書けば名文になるかのやうに誤解を與へ易い。だからこゝは、作者が朝起きて外へ出てゐると、其處へお父さんが起きて來られて、空を見てからおつしやつたから、その言葉を聞いた所から書き出したのてあると特殊的にその生活を描出するやうにすることが大事てある。

5　結尾の「仕合はせに午後は風が弱つた。夕方からは雨になつて、風は全く止んだ。」と頓挫法によつて終結したのは、冒頭の突如として書き起したのと相對して、此の文の次のやうな構想の變化を發見させたいと思ふ。

朝
- 空は雲もなく晴れてゐた
- 朝食がすむと稻の葉がさわ〳〵し出した
- 南の空が黄色になって風がはげしくなる
- 垣根は倒れる
- しをり戸は外れる
- 稻田は大波を打つ

正午
- 午後は風が弱った
- 夕方から雨になって風は止んだ

夕方

6　語句では、あんばい・立春・厄日・農家・つつかい棒等が指導を要する。文字には、仰(仰)・厄(厄)・農・配・倒(到)・困(因)・棒等の誤記し易い漢字が多いから注意を要する。

7　經驗のある兒童には厄日の綴方を書かせるやうにしたらよい。教師は此の課を取扱ふ前後に注意して、好題材を逸せぬやうにするがよい。

時間　約二時間

準備

颱風を説明するに要する地圖。暴風の繪畫。

參考

文字の讀方

二百十日(ニヒヤクトヲカ)。大したことは。仰いで(アオイデ)。大風(オホカゼ)。厄日(ヤクビ)。倒れ(タオレ)。外れる(ハヅレ)。稻田(イナダ)。大波(オホナミ)。

語句の意義

【よいあんばい】(塩梅)　ほど、かげん、くあい等の意、ここでは「よい工合」といったらよい。

【さわ〳〵】物の觸れ合つて鳴る音。

【厄日】厄はわざはひ、災難のあり勝ちの日。

【南の空が黄色になって】暴風の兆である。

【しをり戸】木の枝を折りかけて拵へた戸。

【さして】尙ほ更のこと。

【つつかい棒】物にあてゝつつかふ爲めの棒。「つつかふ」とはつきかふの音便て「突支ふ」と書く。

第二十二　助　力

主眼

この詩を誦讀させることによつて、共同助力の美德を養はせたい、これが本課の眼目とする所であらう。

研究

1　所謂教訓詩の代表的なもので、共同助力の精神を鼓吹すべく歌はれたものである。だから文學的の詩のやうに美を詠嘆したのではない。

2　助力の具體例として、坂道に重き荷車をひきかねた人を物賣が車を押してやつたことゝ、村役場に三十年勤續した小使を人々が救助してやつたことゝを叙してゐるが、此の詩の眼目とするところは次の第三節にある。

共同助力は人の道、
おのれの利のみかへりみず

力を分ち、物をさき、
苦しむ者を、泣く者を、
助けて共に樂しまん。

3　此の句を表解すると

共同助力は人の道―（おのれの利の／みかへりみず）（力を分ち／物をさき）（苦しむ者／泣く者）助けて共に樂まん

この句の主意は前の具體例に照應してゐる。即ち苦しむ者に力を分つのは荷車ひきを助けたのをさし、泣く者に物をさくのはあはれな小使を助けたのをさしてゐるやうである。

4　格調は七五調、一聯五句、尾括式の詩形を採つてゐる。

指導計畫

1　詩の意味はそんなに困難でないから、大抵の兒童なら一讀してその要所を把握するであらう。しかし此の詩の眼目とする所は、要所の把捉でなくて、助力の美德に感ぜしむる點であるから、誠にさうだ、自分もさうしなくてはならぬ、かういふ心持を起させるやうに指導法を講ずる必要がある。

2　それには二つの例話を生かせて取扱ふことが大切である。荷車ひきの方では、時は夏の眞晝であること、場所の坂道であること、人は重き荷物をひきかねてゐることを描出し、之を助けた人は、荷物を擔へる人で、わざ〳〵荷物を下に置いて車を押してやつた所を强調することがよい。村役場の小使の方では、三十年の間勤續した忠實な小使であつたこと、それが老齡のため生活に困窮せることを描き、村民の同情によつて金錢や物品等を出し合つて、生活の安定を得させた點を力說しなければならぬ。

3　次に共同助力の道は如何にと進み、詩の句によつて、苦しむ者泣く者に力を分ち物をさくことであることを發見させて行く。かうした例話との關係を見出させて、秩序整然とした詩の構想を明かにし、誦讀によつて、詩の精神を感得させるやうにする。

4　讀み方で注意を要するは、助力（ジョリョク）・眞晝出（ヒルダ）し合ひて・樂（ラク）等で、文字では、掛・勤が點晝を誤り易い。勤は勤と誤記し易い漢字である。

時間　約二時間

參考

文字の讀方

助力。（ヨリヨク）　眞晝。（マヒル）　出し合ひ。（ダ）（ア）　樂。（ラク）

語句の意義

【眞晝】日中、眞は眞夏眞盛等によつてその意味を理解させるがよい。

【ひきかねる】引くことが出來ない。

【見かねて】よう見てゐず、わきてたゞ見てゐられないて。

【物賣】物を賣る人、商人、あきんど。

【勤めつゞけし】勤續した。

【共同】人々の仲よくして一緒に事をすること。

【助力】助けてやること、力を足してやること、加勢。

【人の道】人の行ふべき道、人たるの行ひ。

【かへり見ず】考へないて、氣にしないて。

第二十三　加藤清正

主眼

いはゆる地震加藤における清正を叙述した文章てある。之を讀んて清正の誠忠と剛直に感動させて、その人格に私淑させたいと思ふ。

研究

1　事件の筋を調べて見ると、次のやうてある。

(1)　朝鮮征伐の先手の大將は加藤清正と小西行長てあつた。行長は清正の軍功をねたんて三成にたのんて清正のことを秀吉にざんげんした。

(2)　秀吉はお氣に入りの三成の言を信じて、清正に歸國を命じた。

(3)　清正は伏見へ歸つて自分の心安い增田長盛をたづねたが長盛は石田と仲直りするが有利なることを說いた。

(4) 清正は立腹して、之れに從はないで歸る。

(5) 正直者の清正は人づきあひが下手なので、誰一人清正を秀吉にとりなす者がなく、とう〳〵秀吉のお目通へ出ることを禁ぜられた。

(6) 或夜伏見地方に大地震が起つた。

(7) 主を思ふ心の深い清正は、お目通へ出ることを禁ぜられてゐる身であるにもかゝはらず、家來の者二百人に槍を持たせて、眞先に伏見城へかけつけた。

(8) 秀吉はその誠心に感じて怒がとけ、その姿を見て征伐の勞苦を察して涙ぐんだ。

(9) 清正、秀吉の許を得て、庭先の御門を固む。

(10) そこへ石田が馳せて來て、さん〳〵に皮肉を言はれる。

(11) 翌日諸大名集合の席に於て秀吉、行長等のざんげんしたことについて尋問する。

(12) 清正その申開きをなし、清正に一點の惡意なく、只だ誠忠以て君國に奉ぜることが明かになり、秀吉より厚く賞せられた。

2 この文章には加藤清正の人となり――剛直にして誠忠な人格と、豐臣秀吉の廣量にしてよく人を容れる大器とが如實に現れてゐる。

3 先づ清正の性格は增田長盛を訪ねて、秀吉に取成を依頼しようとした時、長盛の無禮な態度を見るや立腹した所に現れてゐる。

「神々も照覽あれ、戰一つ出來ず、人のかげごとばかりいふ石田めとは、此の清正一生中直りは致さぬ。たとひ數年の軍功がみとめられず、此のまゝ切腹を命ぜられても、石田めとは中直りは致さぬ。」

と言ひ切つて歸つた。「石田め」といふ所、「數年の軍功はみとめられず、切腹を命ぜられても中直りは致さぬ」といふ所、その剛直さが如何にも強く現れてゐる。「致さぬ」としたのは用語にもその氣分を現はすためである。

4 それから、社交家でなかつた彼は、「誰一人清正を秀吉にとりなす者がなく、とう〳〵太閤のお目通へ出ることを禁ぜられました。」こゝにも清正の策略等を用ひず、正直一遍の人であつたことが窺れる。

5 讒言とはいへ、かゝる悲境に立たせられても、彼が秀吉に對する忠誠の念は少しも變りはなかつた。偶伏見の地震は、彼の變りなき誠忠を表示するよい

機會となつた。否悲運を轉換する好機會となつたのである。地震が起るや清正は勘氣を受けてゐるのも忘れて二百人の家來に用意させて第一に伏見城へかけつけ、秀吉の御機嫌を伺ひ、城門警備の手配をした。この非常時に誰よりも眞先に秀吉のために盡したのは、全く彼の誠忠の念が厚かつたからである。

6　石田三成が登城して、清正の家來に遮られる場面は、全く劇的シーンの濃厚なところで、緊張した文章が一轉して輕快味を感ぜしめる。文の變化の妙所である。清正はさぞ溜飲を下げたことであらう。

7　最後の申開こそ、清正の智勇兼ね備へた名將であつたことを物語つてゐる。清正得意の場面である。秀吉に難詰せられるや、

「明國の使者、某の陣中に參り、『大明の軍勢四十萬、勢はげしくおしよせたるに、日本の大將小西行長は一たまりもなくにげ落ち、もはや朝鮮に日本の武士は一人も居らぬ。生けどつた者は皆かへせ命ばかりは助けてやらう。』などとの廣言。御威光にもかゝはる所と存じ、『小西は日本の大將ならず、まことは堺の町人、道案内の者故、にげも致したであらう。此の清正こそはまことの大將、四十萬の軍勢は此所へ向けよ。切つて〳〵切りまくり、其の勢の都へおしよせ、四百餘州をやきはらはう。』と返書をつかはしましたが、某は四つ五つの頃から親にはなれて、姓も存じませんので、御威光を借りて豐臣と記したのでございます。」

と辯舌爽に申し開きをした。彼が明軍を恐れざる勇氣、堂々たる辯舌は列座の諸大名をして舌を卷かせたことであらう。

8　秀吉の廣量にして部下を容れる大器であつた所は、清正が地震の時第一に馳けつけたのを聞いて、「さて〳〵、早く參つた。」と心の中で喜びました。さうして清正のやせた姿、日にやけた顏を見ては、怒がとけて、涙ぐみました。

先づこゝに現れ、

「お庭先の御門を守る者がございません。某の手で固めませう。」

と清正が言ふと「秀吉はうなづきました。」無言ではあつたが心の中では嬉しく感じたことであらう。

最後の清正の申開を聞くと、秀吉は大に感心して

「それは皆此の方がやりさうな事。清正はつけひもの頃から、此の方のひざ

の上てそだつたので、何時か見習つたものと見える。もと此の方には近い親類の者、豐臣と名のつたのも差支がない。」

といつて、軍功の賞として名刀――國光を與へてゐる。無論清正の潔白な申し開きに感じたのてはあるが、又よく部下を容れる寛量大度の人てあつたことが想像される。

9　文章上からは起首の「行長は清正の軍功をねたみ、石田三成に賴んて、清正のことをざんげんしました。」は百五頁の秀吉は清正を召出して

「其の方は無分別者て、大名になつてもまだ仲間げんくわのくせがぬけぬ。小西程の者を堺の町人といいしり、又明國への返書に豐臣清正と記いたといふが、それはまことの事か。」

と難詰した所と次の清正申し開きの所とは互に照應してゐる。

10　「中直りは致さぬ」「參上仕る」「上樣」「御臺所」「石田てござる。」「何と申す。」「お目通がかなはぬはず。」「其の方」「此の方」等は用語を時代化したものてある。又「『…助けてやらう』などとの廣言。」「それは皆此の方のやりさうな事。」と言ひ切つたのもその氣分を表すに適した表現てある。

指導計畫

1　この文章は事件の性質上三段落になつてゐるから、その段落を明かにして讀ませることが大事だ。

第一段　清正が太閤のお目通を禁ぜられた所まて（九十九頁七行）

第二段　地震の當夜三成が登城をゆるしてやつた所まて（百四頁九行）

第三段　文章の終りまて

そして時間的關係を明瞭にするがよい、

2　史的事實は兒童の質問又は必要に應じて之を補說してやらねばならぬ。例へば朝鮮征伐の大要、石田三成の人物、御臺所、清正の會事まて攻入つたことなどの如きてある。

3　石田三成の人物て讀本に現れてゐるのは

三成は秀吉のお氣に入りてすから、秀吉は之を信じて、（九十七頁）

戰一つ出來ず、人のかげごとばかりいふ石田め、（九十八頁）

石田てござる。お通しなされ。（百三頁）

今天下に此の石田を知らぬ者はあるまい。（百三頁）

これ等を總合しその人物を明かにしてやればよい。

4　兒童の愛好する材料であるから、その興味を利用して、清正を生かして取扱ひたい。それには話方として言語表現に導き、又は脚本として文章表現に導くがよい。又は劇化させるにもふさはしい材料である。

5　清正及び秀吉の人物については、研究欄に詳述しておいた。兒童をして各場面を想像させて清正の人物を活躍させて行きたい。

6　用語の時代化してあるものは、話し方又は朗讀に注意せしめて、語感の上からその氣分を味はせなくてはならぬ。

7　長篇であるから、指導を要する語句も少くない。先手の大將・軍功・歸國・當時・神々・照覽・あれ・人のかげごと・みとめられず・切腹・お目通・人家・堂塔・某・天地・參上・仕る・怒がとけて・うなづきました・大廣間・召出して・無分別者・返書・軍勢・一たまり・もなく・廣言・御威光にもかゝはる・道案内・べんぜつさわやかに・申し開き・其の方・此の方・つけひもの頃・差支・軍功の賞・名刀等はその主なるものであるが、興味を中心としても、讀解に故障があつては、興味が殺がれるから之が指導は閑却してはならぬ。

8　新文字の多いことも注意を要する。誤り易いものをあげると功(切)・賴(頼)・禁・震・幕・登・涙・某・故・別(別)・勢・威・案・姓(性)・感・習・賞・使・親等がある。下手の讀み方は國語に漢字をあてはめたのであるから、下手の如き讀み方があるやうな誤解を起させてはならぬ。

時間　約六時間

準備

朝鮮征伐の地圖。秀吉並に清正の肖像。挿繪の擴大圖。

參考

文字の讀方

先手。中直り。下手。お目通。大地震。夜は。大提灯。御臺所。大聲。上様。御門。某。固め。大廣間。召出して。其の方。無分別者。仲間。大明の軍勢。勢。此の方。

語句の意義

【先手の大將】先鋒隊の大將。
【軍功】戰爭の手柄、いくさの手柄。
【さんげん】事實にないことをあるやうに人を惡くいふこと。
【ねたむ】羨み憎む。
【ろく〳〵】十分に。
【神々も照覽あれ】神々樣も御覽下さいとの意。
【かげごと】かげぐち。
【人づきあひ】人との交際。
【とりなす】よいやうにとりはからふ、二人の間にはいつてつがふよくとりはからふ、仲裁する、調停する。
【お目通へ出る】目の前へ出る、貴人に面會をすること。
【堂塔】社寺の建物等をいふ。
【一さんに】（一散）走ることの非常に早いときにいふ。
【夜はまだ深い】夜明には未だ間がある。
【御臺所】大臣、大將、將軍の內室を尊んでいふ言葉。
【上樣】貴人をさしていふ言葉。
【おし】（壓）地震の爲めに物が倒れておしつけてゐるもの。
【さて〳〵】さてを重ねた感嘆詞である、深く感心した時に出る言葉、「どうも」といふやうな意。
【某】自分の代名詞。
【固めませう】守りませう。
【うなづく】頭をちよつと下に動かすこと、認容の所作。
【かなはぬ】出來ぬ。
【其の方】お前、目下の者を指していふ時。
【無分別者】考へのない者、考への足らぬ者。
【小西程の者】小西のやうな相當身分のあるもの（こゝでは小西のやうな相當な大名）
【のゝしる】惡口をいふ。
【一たまりもなく】「たまる」は踏止まること、しばらくも支へ防ぐこともなく。
【廣言】大きな言葉、大ぼら。

【御威光にもかゝはる所と存じ】御威光にもさはりが起ることゝ思ひ。
【町人】商工人。
【べんぜつさわやかに】（辯舌爽かに）すら〳〵とよどみなく巧みに述べたてること。
【此の方】自分（秀吉自身をさした言葉）
【つけひもの頃】子供の頃（子供の時は衣類に附紐がついてゐるから云ふ。）
【挿繪の尼】幸藏主（コウザウスヒ）て秀吉に仕へた尼僧、清正はこの尼僧を經て秀吉に言上したのである。

第二十四　彼岸

主眼

彼岸について研究欄に示したやうな知識を與へるのが主眼である。

研究

一　彼岸を通俗的に說明したもので、その要所を表示して見ると、

イ　彼岸は春秋二回あつて晝夜の長さ等し

ロ　晝夜の長短と氣候

春の彼岸を過ぐれば　晝やうやく長し　氣候次第に暖し

秋の彼岸を過ぐれば　夜やうやく長し　氣候次第に寒し

暑さ寒さも彼岸まで

ハ　彼岸――七日間

中日（春――春季皇靈祭
　　秋――秋季皇靈祭）

二　彼岸は農家行事の目あて。
　　種蒔、株分、植替、接木、刈込、取入れ等

指導計畫

1　子供の經驗界に緣の遠いものであるが老人の彼岸詣り等によつて子供は彼岸といふことを思ひ出すであらう。

2　文章を一層よく理解させるために、暦を用意させて文章と對照しつゝ研究させるがよい。

3　晝夜の長短等について、子供が疑問を起せば、その理を分り易く說明してやらなければならぬ。

4　皇靈祭について今少し詳しく知らしめたい。

5　「暑さ寒さも彼岸まで」の句の意味は春の彼岸、秋の彼岸等に適用してその意味を明瞭にしておくがよい。即ち春の彼岸なれば寒さは彼岸までであり、秋の彼岸であれば暑さは彼岸までとなる。

6　農家の種蒔株分植替接木刈込取入れ等は實例を示して、その內容を明かにする必要がある。

7　文語文であるから口語に改譯させることも必要である。指導を要する文語は、「過グレバ」「イヘリ」「行ハセラル」等である。

8　文字では彼（ヒガシ）過（スグル）季（キ）定（サダム）の新字、何れも點畫に注意して指導しなければならぬ。

時間　約二時間

準備

暦。
晝夜長短の說明器。

參考

文字の讀方
彼岸（ヒガン）。七日（ナヌカ）。中日（チユウニチ）。晝夜（チウヤ）。

語句の意義

【ヤウヤク】だん〳〵、おひ〳〵。

【長クナルニツレテ】長くなるにしたがつて。

【次第ニ】だん〳〵と。

【暑サ寒サモ彼岸マデ】「暑さも寒さも、彼岸迄のことで、それを過ぎれば春は暖かになり、秋は涼しくなるのは爭はれぬことである。」といふ意味の俚諺である。春の彼岸を過ぎると、もはや寒くて困るといふやうなことがなくなるし、秋の彼岸を過ぎると、もはや暑くて困るといふことがなくなる。

第二十五　電報

主眼

父と子の會話を利用して、自然の裡に電報に關する普通の知識を得させたい。

研究

1　全篇會話から成つてゐる、電報の來たことから父子の會話となり、父がその子に電報のかき方を敎へてゐる場面である。

2　文章によつて、電報に關する知識をあげると次のやうになる。

「シンとあります。」

「あゝ、信吉からだ。よんでごらん。」

この會話によつて、電報には自己の名を略記することがわかる。

「おとうさん、ヘンとは何のことですか。」

「返事のことだ。一つこしらへてごらん。」

この會話によつて、ヘンとは返事を待つ意味であることがわかる。

「アシタノアサ一バンノキシャデタツテイキマス。」

「それでは長過ぎる。電報はなるべくみじかい方がよい。」

この會話から、電報文はなるべく短かく書くことがわかる。

「十五字までは一音信だが、にごりのある字は二字に數へるのだから、……」

この會話からは十五字を一音信といふこと、濁音字は二字に數へることがわかる。

「アス一バンデタチマス。」

「それでもよいが、電報はさうていねいにいはなくてもよい。もつと工夫してごらん。」

この會話から電報文は敬語でなくてもよいことがわかる。

「それでよい。それで十字だから、うちの屋がうのカネキを入れて此の賴信紙に書いてごらん。」

この會話から電報には屋號をも書き得ること、それから賴信紙に書くべきことがわかる。

3　文章は全部問答體で、地の文のないのが特色である。

指導計畫

1　父子の會話を研究させて、その中に電報の規則の大要を獲得させるやうにしたい。

2　研究欄に示した電報の規則の要點は

(1)　電報文はなるべく短く書くこと

(2)　發信人の名は先方にわかる範圍内に簡略に書いてよい

(3)　返事を要求する時は「ヘン」と書くこと

(4)　十五字までが一音信であること

(5)　濁りのある字は二字に數へること

(6)　電報文は敬語で書かぬこと

(7)　電報文は賴信紙に書くべきこと

3　料金のことは出てゐないが一音信何錢なることを附說するがよい。そして電報文を簡潔に書くは料金のためであることを考へさせるがよい。併し

簡潔に過ぎて、意味の不明なものとなつてはならぬことを併せ說くがよい。即ち意味の分る範圍内で、簡潔に書くべきことを知らしめてゆかなければならぬ。

4　挿圖の賴信紙については

(1)　電報文は片假名で書くこと

(2)　濁音の次ぎは一字あけて書くこと

(3)　發信人の名は電文の終りに書き添へること

(4)　發信人の住所氏名は漢字で其の欄に書くこと

(5)　名宛は其の欄に住所氏名を書くこと、漢字で書いて振假名をつけた方が便利なること

(6)　文字はすべて楷書で正しく書くこと

等の說明をなし、認め方を實習させて見るがよい。實習を缺いた知識は役立つものでない。

時間　約三時間（實習と共に）

準備

賴信紙（又はその形式を騰寫刷にしたもの）兒童の數だけ。

送達紙二三通。

參考

文字の讀方

明日（アス）。

語句の意義

【ハナシデキタ】相談でもまとまつたのか、或は商賣上の契約でも成立したのか。

【一音信】電報の字數を數へる單位である、初めの十五字を一音信とし、次の五字を更に一音信とする、以上五字を增す毎に一音信とかぞへる、現行料金表によつて、その一斑を知らせるがよい。

【屋がう】商店等の通り名、店の呼名、大丸、山字、十文屋、ますやの類。

第二十六　注文

主眼

電報によるものと、手紙によるものと二種の注文狀である。かういふ商業上の實用通信についてその認め方の一斑を知らせるのが眼目である。

研究

1　對者

一の文は

不明であるが矢張り山口屋がどこか都會地の卸商への追注文であらう。

二の文は

田舍の小さい町の呉服商（小賣）山口屋小三郎から、都會地の呉服卸商高田屋定吉へ追注文をした手紙であらう。

2　その實際の場面を想像して見よう。

一の電文

呉服商、山口屋から都會地の某卸商へ注文した品物が着いたのである。山口屋では荷を解いて見たが、案外賣行のよささうな品であつたから、荷を受け取つた知らせと同時に更に追注文をしたのである。何か急を要する理由があつたので電報にしたのであらう。

電文の意味は

「荷がついた、同じ品の少しはて向のをもう二十反至急送れ」との意味である。

二の手紙

田舍の呉服商山口屋から、都會地の卸商高田屋へ以前注文してあつた織物三十反、去る十月三日に發送したのが今日（十月十三日）無事に着いたのである。

山口屋では荷を解いた見たが、その品は地も柄もその土地にふさはしいものて、賣行きが必ずよいだらうと思つた。

そこて早速追注文をしたのてある。

それは同じ品で子供向のもの、五十反至急送るやうに言つてやつたのである。

代金は前の注文品と共に二口合せて月末に送金すると附加へてゐるが、この兩者は未だ取引し初めてから間がないのか、何かの理由で代金のこと迄も言つてゐるのであらう。

普通に始終取引して居れば代金のこと等一々注文狀に述べる必要はないのである。

3　敬稱としては「殿」が新しく出てゐる。

指導計畫

1　この文を透してその對者間の實際の狀況を想像させることが第一の仕事である。

2　次にこの種の通信文の特徴を知らしめたい。

卽ち、時候の挨拶や、叙景や、その他用事以外のことは一切かゝないこと、それは實際問題として、かういふ實用向の手紙は用件以外の事をかいてゐる餘裕がないのであるといふことを知らせて置かねばならぬ。

3　「殿」の敬稱は取引上これを用ひることを知らしめたい。

4　十月十三日の日附は本文の「去る三日」及び「本日」と關係づけることを忘れてはならぬ。

時間　約二時間

準備

賴信紙、及書簡箋。

參考

文字の讀方

二〇。お差出し。地。當地向。實行。子供向。二口合せて。月末。山口屋小三郎。高田屋定吉。

語句の意義

【無事】何の故障もなく、いたみもなく。

【地】織地、地質、地合などの意。

【がら】（柄）織模樣などをいふ。

【當地向】その地方に適してゐるもの。

【たち】質、類。

巻八

第一　山の秋

主眼

黄に紅に錦をかざる山の樹々、その間をさへづり飛びかふ小鳥の姿、谷間を流れる清流、山間に栗を拾ひ、きのこをもとめ、椎の實を拾ひ歩く秋の山、かういふ美しく樂しげな山の秋の情景を想像させて、自然の美を味はせたいと思ふ。

研究

1　山間秋色の美しさを説明した文――眼前の印象と過去の經驗から得た知識とを合せて作つた概念的の文である。さうして描寫よりも説明に、具體よりも抽象に傾いてゐるが、何となく秋の山を想像させる文である。

2　全文三段からなつてゐるが、今のその主想と客想とを見ると、次の樣になつてゐる。

一　秋は山が美しい
　二三度降つた雨に山の木の葉が色づいた
　　黄色――くぬぎ
　　赤い――かへで・櫻・ぬるで等
　　林の中――眞赤になつたつたが松の木にからまつてをり
　　日當のよい所――うめもどきが美しい實をならべてゐる

二　秋の山はにぎやか
　小鳥の聲――四十雀・目白・ひよどり・もず・ひわ等
　谷川の水――すんでゐる
　のどをうるほす

第一段には主として視覺に映じた秋の山を書き、色彩の配合の美しさが說明してある。

第二段には主として聽覺に訴いた秋の山の美を書き、小鳥と谷川を配合して、香聲の美しさを現はしてゐる。

三　秋の山の收穫物
　栗――いががゑむ
　きのこ――むらがり出る
　しひの實――くぼたまりにころがり合ふ
　炭燒く煙が所々に立ちはじめた
　うさぎの毛も白くなるだらう

第三段には秋の山の收穫物をあげて、言外に秋の山の樂しさを語つてゐる。炭燒の煙の立つのも、兎の毛の白くなるのも、山の子供には樂しい話題となるのであらう。

指導計畫

1　この種の文章は全文の通讀によつて、文章に現れた山の秋の情趣を摑ませ、それから各文段の主想を明瞭にして、その客想を具體化して、秋の山を想像させるやうに指導するがよい。若し最初において全篇の情趣を摑ませることが不可能であつたら、少くとも各文段の主想を明かにしてその客想を具體化し、秋の山の情趣を感ずるやうに導くがよい。

2　山の秋の美は多く繪畫になるから、本文より想像した情景を出來るだけ繪畫に表現させるがよい。

3　又地方によつては、兒童の山遊びの經驗を文章に創作させることも大事なことである。栗拾ひ、たけがり、山遊びなど好題目はいくらでもある。

4　かやうにして、澄み切つた空にくつきりと鮮かに立つた秋の山――緑色濃き松林の中に、黄に紅に染められた樹々の葉や實の、太陽の光に輝いてゐる美しさや、小鳥の美しい愛らしい聲が、靜寂の林の中、水の清らかな谷川のほとりから聞える趣や、栗・きのこ・しひの實を拾ひ取る樂しさ等を十分に想像させて行く。

5　語句には固有名詞を除けば、からまつて・清水・うるほして・さへづる・ゑむ・むらがつて・くぼたまり位であるが、固有名詞の中には兒童の未知のものも少くないと思ふから、挿繪・標本・實物等により理解をたしかめて行かなければならぬ。

6　文字には櫻・炭・燒の新字と當・清・水の讀替がある。共に點畫の困難な文字であるから注意を要する。殊に當はよく當と誤記し易い。

時間　約二時間

準備

教材にあらはれてゐる草木・鳥類の實物・標本乃至繪畫。

參考

1　文字の讀方

二三度。目立つて。眞赤。日當り。木の葉。小鳥。谷間。清水。所々。

2　語句の意義

【目立つて】目につく程、際立つて、甚しく。

【からまる】まきつく。

【實をならべる】實がなつてゐるといふべきを、こんなに描寫的にいつたのである。

【うるほしては】うるほすは濡らすこと、「は」は屢々繰返す意である。

【さへづる】鳥の鳴くこと。